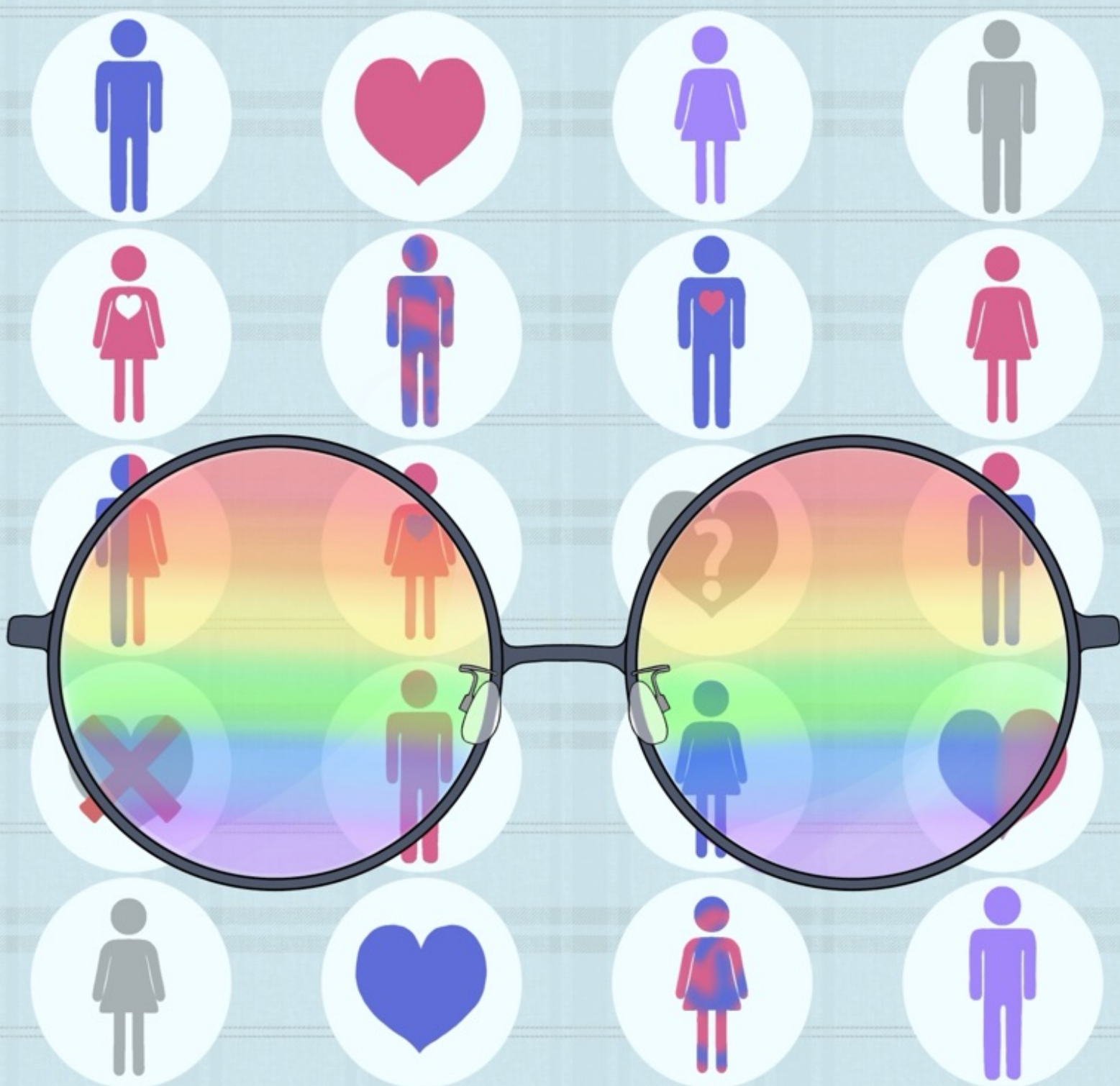


九州大学アクセシビリティ・ピアサポーター

活動報告書2025



目次

1. 組織概要.....	3
九州大学アクセシビリティ・ピアサポーターとは.....	5
アクセシビリティリーダー育成協議会認定資格（AL 資格）とは.....	6
2. 活動報告.....	7
【支援活動】	
IQ ネット	9
キャンパススイッチ班	11
九大祭アクセシビリティ推進室連携班.....	13
九大じぶん学班	14
入学式 式典情報保障.....	16
学位記授与式 式典情報保障	18
電子資料提供サービス班.....	21
荷物運搬サポート	23
パソコンノートテイク（PCNT）班.....	25
発達障害学生支援	27
バリアフリーマップ・設備改善班.....	29
VR・ルート探索アプリ	31
【啓発活動】	
いろいろプロジェクト	33
九大祭班.....	35
啓発イベント班.....	36
啓発物作成班	38
式典情報保障のメイキングビデオ作成班	41
ビブス作成班.....	43
HP・SNS 班.....	45
補助犬フレンドリーキャンパス班.....	47
60 秒でわかる合理的配慮	49
わたし色と班	51

【研修】	
車椅子ガイドヘルプ講座.....	55
ゲートキーパー研修.....	57
研修班.....	58
視覚障害ガイドヘルプ講座.....	60
手話講座.....	62
パソコンノートテイク講座	64
【学外連携】	
令和7年度 大学間連携プログラム（長崎大）	66
大学間交流会 一大分大学ー	68
第21回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム	70
【会議等】	
学生モニター会議	72
総会	74
運営会議.....	76
定例会.....	78
3. 参考資料.....	81
2025年度PS学生一覧	83
九州大学アクセシビリティ・ピアサポート リーダー認定.....	85
カバーデザイン制作意図.....	85

1. 組織概要

九州大学アクセシビリティ・ピアサポーターとは

九州大学における「アクセシビリティ」とは、学内の施設や情報、サービスなどへのアクセスのしやすさを指す。九州大学アクセシビリティ・ピアサポーター（以下、PS）は、九州大学の構成員（学生や教員）である「ピア」のアクセシビリティを高めるべく、全員が大学から委嘱を受け、多様な活動を展開している。PSの育成を担うのは、九州大学キャンパスライフ・健康支援センターインクルージョン支援推進室（以下、IN室）である。

PSの業務は総会、活動、活動報告である。総会は障害者支援の具体的な活動内容を取りまとめるために、年に3回実施している。活動は学内のアクセシビリティ向上のための支援活動のことを指し、直接支援、間接支援、その他の支援活動（情報発信など）、またPS学生の区分によってマネジメント業務などを行う。活動報告は、各年度で報告書を作成し活動を報告している。詳細は以降のページでそれぞれ取り上げる。

PSは2021年に策定された「九州大学アクセシビリティ・ピアサポーターに関する要項」（以下、「要項」）に基づいて活動している。「要項」に従い、PS学生は以下の3つの区分に分けられている。

①スタンダード・ピアサポーター （以下、SPS）

アクセシビリティ関連科目のうち、PSとして活動する年度の年度末までに2科目以上を履修、もしくは履修予定の学生。

②アドバンスド・ピアサポーター （以下、APS）

SPSでの資格要件と直接支援活動に関連する要件を1つ以上満たし、かつAL1級の資格を持っている学生。活動内容としては、SPSの活動に加え、SPSが行う活動のマネジメント・助言・指導、PS活動全体のマネジメントに携わり、支援スキルの水準の維持・向上のため、各種研修会に係る企画・開催等を行う。

③エキスパート・ピアサポーター

（以下、EPS）

APSのうち資格要件に定める【補足】②にある条件を次の領域に区分し、いずれか2領域以上の要件を満たしている学生。

{領域A：(1)(2)、領域B：(3)、領域C：(4)、領域D：(5)、領域E：(6)、領域F：(7)}

活動内容としては、APSの活動に加え、PS全体に対し、専門的知識や経験を踏まえて、各活動内容に関する多角的視点の提示や育成に携わる。

なお、パソコンノートテイク、映像教材への字幕挿入、手話サポーター、車椅子ガイドヘルプ、視覚障害者ガイドヘルプ、発達障害や精神障害者への支援など、定められた条件のいずれかを満たした場合のみ、関連する直接支援活動に従事できる。間接支援活動や啓発活動、研修等への参加に制限はない。

【補足】

「アクセシビリティ関連科目」および「直接支援活動に関連する要件」は、「要項」により次のように定められている。

①アクセシビリティ関連科目

(1)基幹教育科目

- ・バリアフリー支援入門
- ・ユニバーサルデザイン研究
- ・アクセシビリティ入門
- ・アクセシビリティ支援入門
- ・アクセシビリティ基礎
- ・アクセシビリティマネジメント研究

（※高年次基幹教育科目）

(2)教育学部専攻教育科目

- ・アクセシビリティ心理学講義Ⅰ
- ・アクセシビリティ心理学講義Ⅱ
- ・アクセシビリティ心理学演習
- ・アクセシビリティ実践演習

②直接支援活動に関連する要件

- (1)パソコンノートテイク
- (2)映像教材への字幕挿入
- (3)手話サポーター
- (4)車椅子ガイドヘルプ
- (5)視覚障害者ガイドヘルプ
- (6)発達障害や精神障害者への支援
- (7)その他の支援経験・助言経験など

アクセシビリティリーダー育成協議会認定資格（AL 資格）とは

アクセシビリティリーダー（以下、AL）とは、個人や社会、環境や状況の多様性をよく理解し、様々な文脈においてアクセシビリティの推進により可能性を開拓できる人材のことである。

AL 育成プログラム（以下、ALP）の資格は、AL 育成協議会によって設定された、AL の育成を目指して行うものである。ALP は「教育課程」「資格認定」および資格取得者を対象とした「インターンシップ」「キャンプ」で構成される、総合的な人材育成・活用プログラムである。教育課程を通じ、アクセシビリティに関連する基礎概念、多様性理解、情報・環境・制度を体系的に学び、意識・経験に立脚したアクセシビリティ・コーディネート技術・方法論を習得する。

AL 資格には1級と2級があり、APSになるためには1級の資格取得が必要で

ある。本学ではAL 資格試験受験のための要件は以下の通りである。

参考：

- 九州大学ホームページ 障害者支援
ピア・サポーター学生について

<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/publication/handicapped-support/handicapped/>

- インクルージョン支援推進室

<https://chc.kyushu-u.ac.jp/organization/barrierfree/>

- AL 育成協議会

<https://al-pc.jp/web/>

【AL資格要件】

- (1) オンライン講座【導入編】（90分）
- (2) オンライン講座【基礎編】（8時間）

AL2級資格要件

- (3) アクセシビリティ関連授業の受講、もしくはPS活動時間：4pt取得

<該当するアクセシビリティ関連授業>

【基幹教育】・アクセシビリティ入門

・バリアフリー支援入門

・アクセシビリティ支援入門

・ユニバーサルデザイン研究

【教育学部】・アクセシビリティ心理学講義Ⅰ

・アクセシビリティ心理学講義Ⅱ

<PS活動時間>

・8時間：1pt

・15時間：2pt

・30時間：4pt

AL1級
資格要件

- (4) アクセシビリティ関連授業の受講、もしくはPSマネジメント業務半期

<該当するアクセシビリティ関連授業>

【高年次基幹教育】・アクセシビリティ・マネジメント研究

【教育学部】・アクセシビリティ心理学演習

・アクセシビリティ実践演習

2. 活動報告

【IQ ネット】

文責：秋武百華、北村由依菜

1. 目的

本活動は福岡市教育委員会との共催の下で、大学進学を目指す発達障害のある中高生を対象に大学進学への移行支援を行う活動である。以下、3つの目的に沿って活動を実施した。

- ①Self Program：自己理解を深める
- ②Progress Program：自身の強みを活かすために大学へのイメージを膨らませる
- ③Challenge Program：苦手なことに挑戦し、問題解決の手がかりをつかむ

なお、PS は中高生との関わりを通して発達障害に関する理解を深めるとともにその支援スキルの向上を目指した。

2. メンバー

リーダー：北村由依菜

サブリーダー：秋武百華

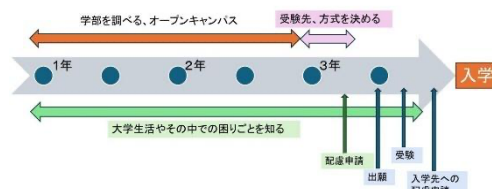
メンバー：清田、武内、黒田、藤田、小野、瀧内、南里、川村、村川

3. 活動内容

前年度のIQ ネットでは、参加者自身の興味関心について理解を深め、それが大学生活や進路決定の中でどのように位置づいていくのかを考えた。今年度は、テーマを「大学入学までの道のりを体験しよう!」とし、大学進学 of 具体的なプロセスに沿って、必要な準備を体験することに焦点を当てた。

初回の6月には、1年のテーマの全貌について確認した。7月は、大学入学準備の内、出願に焦点を当てた。そもそも出願とは何なのか、必要な場面と出願までのスケジュールについて伝えた。8月2日は、OCに参加した。事前に各参加者の興味関心や特性に合わせたモデルコースを作成し、それを参考に行きたい場所を選択してもらう形で進めた。参加者の中高生は、興味のある学部 of 学生と交流したり、空き時間の過ごし方を想像したりと、それぞれ大学生活への理解を深めていた。8月30日は、自分の興味・

高校生からのフローチャート(目安)



(図1) 参加者に提示した大学入学までのフローチャート

自分の発達障害の特性って...?

当てはまると思うものにチェックしよう!

情報収集/見通しをもつことへの困り感

- ☐ 情報をどうやって集めたらいいかわからない
- ☐ 長い文章、難しい文章を読むのが苦手
- ☐ 同時にいくつものことを進めることができない
- ☐ 締め切りまでに課題をこなすことが難しい
- ☐ 思いもよらないこと(急な休講や居室変更)が起こるとどうしたらいいかわからなくなる



興味・関心/周りの環境への困り感

- ☐ 興味のない授業に集中できない
- ☐ 興味のあることに夢中になって他のやるべきことを忘れる・後回しにする
- ☐ たくさんの方がいる場所は疲れやすい
- ☐ 周りの環境が変わると、慣れるのが難しい



コミュニケーションへの困り感

- ☐ 新しい友達を作るのが苦手
- ☐ グループ活動にどのように参加したらいいかわからない
- ☐ 他の人の考えていることを想像するのが難しい
- ☐ 言いたいことがあっても、言葉がスムーズにでない



(図2) 参加者の特性理解のためのワークシート

関心や前回までのプログラムで知ったことをもとにアイデアマップを作成していき、進学したい具体的な学部の検討へと発展させた。10月は、前回のプログラムで調べた学部について、その学部の入試に必要な受験科目を調べた。大学・学部選択の際には、学習内容・卒業後の進路に加えて、入試科目の違いも基準となることを説明した。11月は、キャンパススイッチ(CS)に参加した。

12月には、ワークシートを用いて参加者の苦手ポイントについて整理し、大学の中で直面しそうな困り感を考えた。例えば、「新しい友達を作るのが苦手」という特性から、「授業ごとに受講者が異なるという部分に困り感が発生するかもしれない」と具体的な状況を想像していた。

2月には、今年度のIQネットのまとめとして、「大学生になった自分」になりきって、自己紹介を行った。自己紹介では、通っている学部・最近楽しいこと・自身の特性と困り感・背景にある社会的障壁・利用している合理的配慮などを自身の言葉で語った。参加者の一人は、情報収集について「情報を文章で提示してもらい、とくに必要な部分を目立つようにしてもらおう」という合理的配慮を語っていた。また、「合理的配慮を利用していない」と語った参加者もいた。

4. 活動の振り返り

中高生の言動にも変化が見られた。具体的には、回を重ねるごとに、中高生自身が自らの言葉で特性や必要な配慮を発言できるようになっていた。さらに、自身の特性について、大学の授業の場合を想定して新たな困り感を見出すなど、

Selfの観点に向き合うことができていた。また、保護者の方からは、IQネットという場において子どもが受け入れられていることが安心になるということだった。PSが中高生にとって尊敬できる対象となっていたなどの声が寄せられることもあり、IQネットが参加者の中高生にとって、単なる移行支援の場以上の役割を果たしていることがうかがえる。

一方で、今後に向けていくつかの課題も挙げられる。まず、中高生が毎回参加できるわけではないため、参加者にとっては内容の連続性が感じにくい場面があった。過去回の内容の記憶が曖昧、未参加回の内容をイメージしにくいなどである。また、他の活動との兼任メンバーも多く、定例会の参加者が少数になることも多かった。結果として、プログラム内容や目的について共通認識が十分に形成できない場面もあった。

来年度は、今年度の良かった点を継続しつつ、過去回や未参加回の内容共有を充実させることや、IQネットを主軸として参加できるメンバーを増やすことなどにより、課題点の改善を図りたい。これにより参加者がより主体的に取り組めるプログラムになると考えられる。

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
6/14	1302 教室	大学入学までのスケジュールを知ろう	7人(5人)
7/5	1302 教室	入試・出願について知ろう	8人(4人)
8/2	3501 教室	大学のイメージをつかもう	7人(4人)
8/30	1302 教室	大学の学部について知ろう	7人(2人)
10/4	1302 教室	入試科目について知ろう	10人(4人)
11/1	1302 教室	大学での生活面について知ろう	13人(4人)
12/6	1302 教室	大学生活での困り感を考えよう	10人(4人)
1/10	1302 教室	合理的配慮・学生支援について知ろう	7人(4人)
2/14	1302 教室	「大学生の自分」として自己紹介しよう	9人(3人)

*参加人数の括弧内は中高生の参加人数

【キャンパススイッチ班】

文責：森下はなの

1. 目的

発達障害のある中高生の大学移行支援として、大学生活へのイメージ向上をサポートするために、オープンキャンパスを行った。今年度は、アルバイトやサークル等、大学生活の学業以外の面に焦点をあてた。

2. メンバー

リーダー：森下はなの

サブリーダー：佐藤理菜、深堀由倫香

メンバー：武内、武末、秋武、黒田、永野、松尾（果）

3. 活動内容

大学のイベントの雰囲気を知ってもらうために、九大祭1日目と同日に開催した。また、IQ ネットの年間プログラムの一環として、実施した。

当日の参加者は、中高生が4名、PS13名だった。参加者に合わせた対応をするために、中高生1名ずつにPS2名が付き、個別に問いかけなどを行った。

①バランス重視型大学生の1週間

	月	火	水	木	金	土	日
1限	授業		授業	授業	授業		休日にサークル活動をする人もいる
2限	授業	授業		授業	授業		
3限		授業	授業		授業		サークル
4限	授業	授業	授業	バイト	授業	バイト	サークル
5限			授業	バイト		バイト	サークル
授業後	バイトは大学終わりや休日にする			バイト		バイト	

(図1) スケジュール表パターン1

気になったことを書こう！

ここまでの話を聞いて、
気になったことや大学生に聞いてみたいと思ったことを
ワークシートの「気になったことを書こう」の欄に書こう

*自分で書くのが難しいときは、PS学生が代わりに書くので
教えてください

(図2) 当日使用したスライド

プログラムの工夫を4つ挙げる。

①セクション1で、参加中高生が大学生活や自己の理解を深められるように、ターム間に考えを整理する時間を設けた。当日、参加中高生は積極的に疑問点や感想を書きこんでおり、PSは生徒の理解度や関心を把握することができた。

②リフレッシュのために、セクション間に、立って動くレクリエーション（バースデーチェーン）を実施した。

③セクション2では、昨年度8月の反省から、中高生が情報を捉えやすいよう、視覚情報（スライド）を用意し、ターム間には質疑応答の時間を設けた。

④一人一人違うという大学生活の特徴が伝わるよう、空き時間の過ごし方により4パターンのスケジュール表を作成し、A3一枚にまとめて、配布した。

また、運営上の工夫として、開始時間が遅れて当日のスケジュールが押し込まれないよう、参加者募集のチラシに、開始時刻（9:30）だけでなく、開場時刻（9:00）を記載した。

4. 活動の振り返り

まず、プログラムの良かった点として、参加中高生とPSが話せる時間を多く確保できた。本人の理解度を把握しながら関わり、関心に合わせた情報提供ができた。また、PSそれぞれが体験談を話すことで、大学生活の実態や多様さを伝えることができた。

次に、活動上の難しさとして、IQ ネットの一環であることや、九大祭と同日開催であることがあった。今後は、キャンパススイッチ班とIQ ネット班の連携の仕方について、共通理解を築く必要があると考える。

また、活動スケジュールリング上の反省点として、ワーク等の内容の精査が不十分なままスライド作成に移ってしまった。今後は、前もって、目的と活動内容の合理性を精査するべきだと考える。

最後に、当日参加中高生と関わるなかでの反省点を挙げる。まず、全体に向けて指示を行う際に、曖昧な言い回しになってしまい、意味が伝わりにくくなった。今後は、リハーサルの際に進行の練習も含めて行うことで、全員で進行役をサポートする体制を整えたい。次に、一方向の情報伝達を避けたいあまり、ワークの後等に参加中高生に発表を求める場

面が多くなり、結果、不安を覚える参加中高生がいた。今後は、全体発表以外の双方向コミュニケーションの手段を講じ、効果的な場面でのみ全体共有を求めるようにしたい。例えば、進行役が各グループを回り、話を聞くことで、参加中高生の反応を見ながら活動を進められる。

表1) 当日のプログラムの概要

時間	内容
9:40-9:50	本日の目標・流れの共有 アイスブレイク ワーク「大学生生活ってどんなイメージ？」
9:50-11:00	§ 1. 大学生生活の始まり方 1-1. 暮らし・生活 1-2. アルバイト 1-3. サークル
11:00-11:40	§ 2. 当事者学生の話 2-1. サークルについて 2-2. 大学生活について ワーク「大学生活で楽しみなこと／困りそうなことを考えてみよう」
11:40-12:00	まとめ 振り返りの時間

表2) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
6/9	定例会	基礎知識の共有	4人
6/23		テーマの決定	2人
6/30		ワークの内容の検討	4人
7/7		プログラムの決定	2人
7/14			3人
8/25	PS ルーム	スライドの検討	3人
10/6	伊都	ロールプレイ	8人
10/6	定例会	ロールプレイの振り返り	10人
10/20		参加生徒の情報共有	11人
10/27	伊都	リハーサル	9人
11/1	伊都	キャンパススイッチ当日	13人

【九大祭アクセシビリティ推進室連携班】

文責：樋口珠希

1. 目的

九大祭実行委員内の部署であるアクセシビリティ推進室と連携し、第79回九大祭における総合的なアクセシビリティ改善のためのサポートを行う活動である。

なお、2026年度前期の活動開始を目指し、九大祭実行委員、IN室、学務部学生支援課など関係各位との協議を進めている段階である。

九大祭アクセシビリティ推進室連携班内において九大祭におけるアクセシビリティ改善の余地を精査し、改善提案書を作成した上で、アクセシビリティ推進室側に送付する形を取る予定である。その後、アクセシビリティ推進室から九大祭実行委員内の各部署に提言を行っていたことによって、実際に九大祭のアクセシビリティ向上を目指す。

2. メンバー

メンバー：鈴木、樋口、宮居

3. 活動内容

12月17日には、アクセシビリティ推進室の開設の意義、九大祭連携班との連携体制について、第79回九大祭実行委員長に対面での説明を行った。アクセシビリティ推進室の立ち上げにあたって、九大祭実行委員内の立ち位置などを決定した。

12月24日には、アクセシビリティ推進室並びに九大祭連携班の立ち上げについて、IN室の先生方に説明を行った。先生方のフィードバックを受け、インクルーシブかつサステナブルな九大祭のアクセシビリティ改善への方向性を確認し、メンバーで共有した。また、九大祭実行委員から学生支援課へのIN室との協力依頼を出すことで合意し、実行委員長へ伝達する方針を固めた。

1月13日には、12月24日のIN室との打ち合わせにおいて合意した、九大祭実行委員から学生支援課へのIN室との協力依頼を出すため、再度実行委員長のもとに出向き、依頼の送付を行った。また、九大祭実行委員内の各局の仕事の概要についてもお話を伺った。

4. 活動の振り返り

九大祭実行委員内に部署としてアクセシビリティ推進室を開設し、障害学生モニター会議で提案があった九大祭のアクセシビリティ改善に寄与できる体制が整いつつあることは、大きな成果であるだろう。来年前期から本格的に班活動が開始するが、準備や期限の確認を怠らず、班活動をスムーズに進行したい。無事来年度以降の九大祭がより多くの人を楽しんでもらえるよう、関係各所、またメンバー間の意見交換を続けていきたい。

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
12/17	学祭室	実行委員長へのアクセシビリティ推進室開設を依頼	1人
12/24	PSルーム	IN室教員への概要説明	3人
1/13	学祭室	実行委員長から学務へのIN室との協力依頼メールの送信依頼、各局活動説明	2人

【九大じぶん学班】

文責：武末愛理

1. 目的

障害の有無に関わらず、全ての中高生が将来の進路として大学進学を選択できる環境を実現することを目的とする。具体的には、特別支援学校に通う生徒が合理的配慮等の活用により、進学という選択肢を持てるよう支援することを通して、多様な進路選択の保障を目指す。

2. メンバー

リーダー：武末愛理、秋武百華

サブリーダー：江島輪、藤田真那、荒瀬泰珂

メンバー：黄、武内、三浦、本岡、森、黒田、檜木、深堀、福長、岩元、江口、瀧内、友岡、駒松

3. 活動内容

前期の活動では、前年度と福岡聴覚特別支援学校（小学部）の見学を踏まえて、福岡聴覚特別支援学校（高等部）の先生方との交流会に向けた準備を行った。しかし、実際の打ち合わせを経て、そのニーズが少なかったことから交流会の開催には至らなかった。

後期の活動では、株式会社 DLS（難聴児童生徒のサポートを業務の中心とする業態）さんにお声がけをいただき、「じぶん探検ワークショップ」を行うことを目標に活動した。ワークショップでは、難聴の高校生が大学生活に近いものを体験することで、「失敗する」経験や「困る」経験をして欲しいというニーズに応え、高校生たちが今後の進路選択を考える一助になるように企画を行った。

4. 活動の振り返り

前年度からの引き継ぎを踏まえ、特別支援学校のニーズに応じて活動方針を柔軟に見直しながら、最終的には株式会社 DLS を対象としたワークショップを実施することができた。本班では一貫して、「障害の有無に関わらず、全ての中高生が将来の進路として大学進学を選択できる環境の実現」を目標に活動を行った。そのためワークショップでは、多様な将来像を尊重した内容を構成した。当日はコミュニケーションボードを活用し、手話や要約筆記ができない学生も工夫しながら交流を深めることができた。

一方で、地域（学校、団体を含む）との継続的な関係づくりや、団体と個人のそれぞれ異なるニーズに対応する情報保障の面には課題も残った。来年度は、地域連携のあり方自体をみつめ直し、学校との連携を深めることの意義を再認識していきたい。



（図1）中央図書館の見学

表1）活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
4/25	オンライン	活動内容の決定	2人
5/19	オンライン	活動内容の共有	13人

続き			
6/9	定例会	前年度からの引き継ぎ、年間スケジュールの設定	14人
6/16	オンライン	小学部見学に向けた検討事項の作成	2人
6/23	定例会	小学部見学に向けた事前検討	8人
7/4	福岡聴覚特別支援学校（小学部）見学	設備、授業実践の見学	2人
7/7	定例会	小学部見学の報告	7人
7/14	定例会	次回の見学（高等部）に向けた事前検討	6人
10/20	定例会	高等部見学に向けた案作成	5人
10/27	定例会	高等部見学に向けた資料作成	4人
11/7	オンライン	福岡聴覚特別支援学校（高等部）に向けた事前確認	5人
11/10	定例会	高等部見学に向けた資料作成	5人
11/18	福岡聴覚特別支援学校（高等部）見学	設備、授業実践の見学、校長先生との対話	3人
12/1	定例会	高大接続について、ワールドカフェ形式で再検討	5人
12/2	オンライン	定例会計画と活動方針の見直し	4人
12/8	定例会	じぶん探検ワークショップの企画	11人
12/15	定例会	DLS との打ち合わせに向けた質問事項の作成	9人
1/6	オンライン	株式会社 DLS と打ち合わせ	1人
1/12	オンライン	株式会社 DLS との打ち合わせ内容の共有	3人
1/19	定例会	じぶん探検ワークショップの交流内容検討	16人
1/26	定例会	じぶん探検ワークショップに向けたスライド作成	12人
2/10	オンライン	じぶん探検ワークショッププログラム検討	4人
2/21	伊都キャンパス	じぶん探検ワークショップ	6人

【入学式 式典情報保障】

文責：白水愛彩、濱崎裕理

①手話通訳（白水）

1. 目的

2025 年度入学式（学部・大学院）における情報保障として手話通訳を行った。学内の学生だけでなく、学生の保護者や配信を視聴する手話ユーザー、聴覚障害のある中高生の大学選びの参考のために 2024 年度から手話を学んだ PS によって行われている。

2. メンバー

白水、森下、馴松

3. 活動内容

事前に対面で集まり、IN 室の間田先生、手話通訳士の友池さんにご指導いただき、手話表現の確認を行った。今年度から、完全に PS だけで入学式全体の手話通訳を行った。

4. 活動の振り返り

本活動の大きな意義として、聴覚障害者を排除しない環境づくりへの貢献がある。聴覚障害者が式典の内容を理解し、

安心して参加できるよう支援体制が整えられていることは、包括的な社会の実現において極めて重要である。

私は、昨年度に引き続き、入学式における手話通訳を担当した。昨年度の活動で自身の手話通訳技術の未熟さを痛感したことから、今年度は福岡市手話通訳者養成講座に通い、手話表現や通訳技術について体系的に深く学んだ。その結果、学習の成果を一定程度発揮できたと感じている。

今年度からは学生のみで手話通訳を担当する体制となり、これまで以上に強い責任を感じながら活動に臨んだ。聴覚障害のある参加者に正確な情報を届ける役割を担っていることを改めて自覚する機会となった。一方で、来賓の祝辞などについては、当日に内容が追加・変更されることもあり、事前準備だけでは十分に対応しきれない場面があった。今後は、即時性の高い表現への対応力や、予期せぬ発言にも柔軟に対応できる通訳技術をさらに向上させていく必要があると感じている。

表 1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
2025/3/27	PS ルーム	担当箇所・手話表現の確認	2 人
2025/3/28		手話表現の確認	3 人
2025/3/31		手話表現の確認	3 人
4/2	椎木講堂	リハーサル	3 人
4/3		入学式 振り返り	3 人

②リアルタイム字幕（濱崎）

1. 目的

聴覚障害者や発達障害者をはじめ、音声情報を聞き取り、理解することが困難な教職員、学生およびその保護者を対象として、字幕を表出した。2025年度入学式（学部・大学院）にて、音声情報を文字情報へと変換し、対象者が情報へアクセスすることの保障を目的とした。

2. メンバー

延原、上村、濱崎、大森

3. 活動内容

・支援前日

始めに、支援で使用するパソコンやモニター等の機材の配置を確認・決定した。その後、あらかじめ原稿が提示されているパートの前ロールを作成し、全体を通すリハーサルを行った。その際、前ロールの誤字脱字などの訂正も逐一行った。

・支援当日

式典が開始する時間まで、当日明らかになった原稿の修正箇所を前ロールに反映させたり、字幕が正しく表出されるかの確認を行ったりした。式典内では、原稿と異なる発言に対して、その場で文字をタイプし、臨機応変に対応した。

・支援後

式典終了後、すみやかに移動し、担当者間で振り返りを行って、課題点等を共有した。

4. 活動の振り返り

今回の支援では、式典情報保障の経験がある学生と経験のない学生を交互に配置することで、トラブルが生じた際に連携が取りやすいように工夫した。

加えて、前ロール作成の担当部分と表出の担当部分をおおよそ揃えることで、スムーズな表出が可能となった。また、原稿がないパートに対しても、事前資料から大まかな前ロールを作成することで対応しやすくなった。しかしながら、原稿どおりではない発言の表出にあたって、入力と修正が一部分に集中したり、連絡が口頭と連絡パネルの双方で行われたりするなどの問題も生じた。こうした際の対応について、あらかじめ担当学生内で共有を行っておく必要がある。さらに、パソコンの接続が途切れるトラブルも起こったため、予備のパソコンを準備しておくことと安心である。

今回生じた課題をしっかりと引継ぎ、式典における更なるアクセシビリティ向上に努めたい。

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
4/2	椎木講堂	前ロール作成、リハーサル	4人
4/3	椎木講堂 1304 教室	入学式 振り返り	4人

【学位記授与式 式典情報保障】

文責：秋武百華、野中莉央

①手話通訳（秋武）

1. 目的

2025 年度学位記授与式（学部・大学院）にて日常的に手話を使用する人を対象に手話通訳を行った。学内の当事者および式典を視聴する保護者などの手話ユーザーへの情報保障や、聴覚障害のある中高生の大学選びの参考、全学への手話の啓発を目的とする。

2. メンバー

武内、秋武、佐藤、森下、馴松
手話通訳士：井料美輝子先生、友池はすみ先生

3. 活動内容

学位記授与式における音声情報を手話に置き換え、情報保障を行った。事前に手話通訳士の先生方にご指導いただきながら、手話表現の確認を行った。司会者・総長・総代など、それぞれの話者ごとに担当者を決めて通訳を担当した。

4. 活動の振り返り

学生のみで当日の情報保障を行うにあたり、2 名の手話通訳士の方にご指導いただくのは初の体制であった。この体制により学生 1 人当たりの負担が減り、1 対 1 での手厚いご指導をいただくことができ、質の高い情報保障を行うことができたと考えられる。また、学生同士で学習方法の共有を行ったり、表現を見直したりするなど、主体的に学びを深めることができた。一方、学生による手話の情報保障を継続するためには、PS 活動の中における手話通訳が可能となるレベルの技術の習得が難しいことが課題として挙げられる。手話講座（上級）の開講などを IN 室の先生方には検討していただくとともに、学生間では、式典での手話通訳に当たっては事前指導があることを共有し、心理的なハードルを下げることや手話部（PS 学生が運営する手話を学ぶ団体）の活用が求められる。

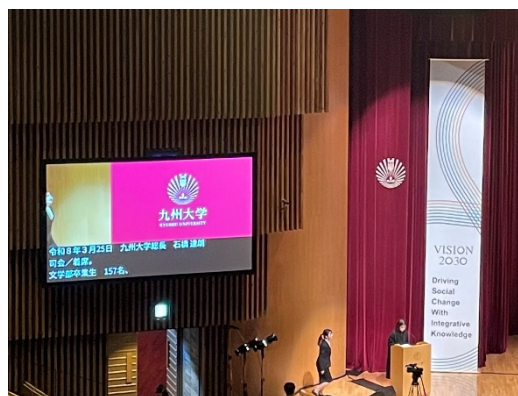
表 1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
2/20	5201	顔合わせ、担当箇所決定	4 人
3/1	クローバープラザ春日	耳の日記念集会参加、福岡県聴覚障害者協会理事長への挨拶	4 人
3/6	2103	手話表現の確認	4 人
3/10	2103	手話表現の確認	4 人
3/16	2103	手話表現の確認	5 人
3/23	2103	手話表現の確認	4 人
3/24	1304、椎木講堂	手話表現の確認、リハーサル	5 人
3/25	1304、椎木講堂	手話通訳当日、振り返り	5 人

②リアルタイム字幕（野中）

1. 目的

2025 年度学位記授与式（学部・大学院）にて、聴覚障害者や発達障害者など、音声情報を聞き取り、理解することが難しい学生や教職員、保護者に対し、音声情報へのアクセスを保障することを目的とする。音声情報を文字情報に変換し、字幕として会場のサイドスクリーンおよび YouTube 配信の画面に表出した（図 1）。



（図 1）サイドスクリーンの様子

2. メンバー

重信、野中、福長、福元、村川

3. 活動内容

【事前準備】

椎木講堂裏の舞台裏にて、パソコンやモニター等の機材の配置を確認・決定した（図 2）。その後、事前に原稿があるもの（司会、総長告辞、総代答辞など）は前ロール（事前にいただいた原稿を適切な文字表記に直し、表出のタイミングで改行を加えたもの）を作成した。作成した前ロールを実際に表出して、全員でひととおり確認し、誤字脱字や行間、見やすさの確認を行った。



（図 2）機材設置の様子

【式典当日】

式典が開始する直前にも、配信画面の字幕の確認や、前ロールの誤字脱字の確認を再度行った。式典中は、前ロールの内容と実際に話された内容を照らし合わせながら、変更があれば適宜前ロールを修正して字幕を表出した。軽微な修正に加え、「おめでとうございます。」や「(拍手)」など、原稿にない内容が話された際には、それらも都度前ロールに追記し、表出を行った。表出内容に関して確認事項（表記の統一、改行の有無など）がある際は、その都度担当者間で互いに確認した。

【式典終了後】

PS ルームにて振り返りを行った。担当者の感想や課題点などを共有した。

4. 活動の振り返り

昨年度の学位記授与式の参加者から、「後ろの方の席から字幕が見えにくかった」という声が上がっていたため、今回は画面に表示される行数を 1 行減らし、文字の大きさを大きくすることで、後方席からでも字幕を読むことができるよう調整した。この変更により、字幕が進むスピードが速くなるということが懸念されたが、1 回で表出する文字数を少なくする、改行のタイミングを可能な限り遅くして字幕が上に流れにくくする、といった工夫をすることで、最大限見やすい字幕を作成することを心がけた。

もうひとつの変更点として、机の配置が挙げられる。昨年度までは、担当者 4 名が横並びになり、壁を向いて活動を行っていたが、今回は向かい合わせで座るようにした（図 2）。このことにより、支援者同士の距離が近くなったことで、以前よりも連携が取りやすくなったと感じている。

また、今回の式典に向けて、3月上旬に情報保障担当者を対象に練習会を行っていたため、事前準備から当日の動きまでスムーズに進行できた。練習会については、今後も行っていきたいと考えている。

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
3/2	オンライン	式典情報保障（字幕）練習会①	2人
3/6	〃	式典情報保障（字幕）練習会②	4人
3/12	〃	式典情報保障（字幕）練習会③	4人
3/24	椎木講堂	リハーサル（前ロール作成、表出確認）	5人
3/25	〃	学位記授与式、振り返り	5人

【電子資料提供サービス班】

文責：山田和彦

1. 目的

本活動は、本学の視覚障害等のある構成員に向けた「電子資料提供サービス」（以下、「本サービス」という。）を実施することで、本学の研究、教育、その他の活動における、情動的・制度的アクセシビリティを向上させることを目的とした。本サービスは、視覚障害等のある学生からの申請に基づき、図書等の資料を、当該学生にとってアクセシビリティの高い電子形式にして提供するものである。

なお、本サービスは、障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（以下、「障害者差別解消法」という。）における合理的配慮の義務に基づき、著作権法第37条（視覚障害者等のための複製等）の規定に則り実施されるものである。

2. メンバー

リーダー：山田和彦

サブリーダー：藤田真那、川村菜絵

3. 活動内容

主に以下2つの活動を実施した。

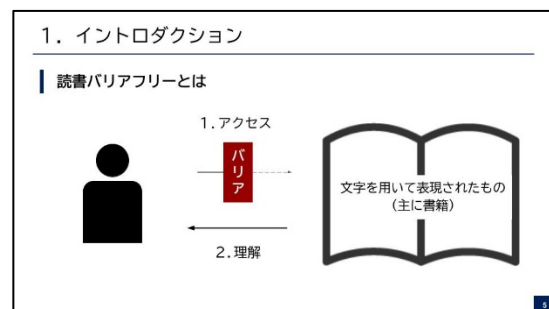
1つ目は、電子資料提供サービスの実現に向けた、全学体制構築の取り組みである。具体的には、まず、本学における現状把握、及び他大学の事例調査を行い、サービスの概要を構想した企画書をIN室に提出した。次に、附属図書館、学生支援課学生支援係、IN室、PSの四者による意見交換会を計6回実施した。同会では、本学の現状と課題の共有から始まり、PSによるサービスの提案・承認、及びその実施に向けた学内制度の整備に関する議論等が行われた。また、検討の参考として、既に視覚障害者等に向けて資料電子化サービスを提供している筑波大学より、先行事例の聞き取り調査を実施した。意見交換会を経て構築した本サービスは、令和7年度第7回障害者支援

推進委員会において全学向けに報告され、令和8年度より、試行運用が開始される予定である。



（図1）意見交換会の様子

2つ目は、定例会ミニレクチャーを通じたPS向けの啓発活動である。「読書バリアフリー」というキーワードのもと、視覚障害者等の読書におけるアクセシビリティについて、計2回のミニレクチャーを行った。第1回は、読書バリアフリーに関する基礎的な知識について、第2回は、本学における読書バリアフリーの現状について解説した。



（図2）ミニレクチャーのスライド

4. 活動の振り返り

本活動の主要な成果は、電子資料提供サービスを実現したことである。令和7年度第7回障害者支援推進委員会にて、令和8年度からの本サービスの試行運用開始について報告が行われ、その実施に向けた全学的な体制が整備された。

この成果は、本学における情動的・制度的アクセシビリティの向上に寄与し、本学の「読書バリアフリー」を推進する上で極めて重要な進展であると位置付けられる。

一方で、次年度以降の本サービスの運用においては、以下3点の課題が存在する。第一に、サービス対象の拡大である。現時点では対象が学生に限定されているが、次年度以降は教職員も含めた本学の全構成員を対象とすべく、引き続き検討を進める。第二に、提供形式の拡大である。現状では、提供できる電子ファイルとして、作成に高度なスキルを要する「校正済みテキストデータ」が含まれていない。次年度以降は、校正済みテキストデータの作成環境を整備し、提供媒体への追加を目指す。第三に、事前改善措置としての電子資料の充実である。障害者差別解消法第5条では、合理的配慮を的確に行うため、事前の環境整備が努力義務とされている。本サービスの運用に当たっても、利用者からの申請に応じた電子化だけではなく、シラバス掲載図書等、利用可能性の高い資料を予め電子化することで、アクセシブルな資料の利用に係る基礎的環境を整備する必要がある。これにより、資料電子化申請時

に、当該資料を即時提供することができ、より質の高いサービスの実現が可能となる。この点に関しても、次年度以降附属図書館と連携して取り組む予定である。

本活動を通じた最大の気づきは、「印刷物が教育・研究活動における社会的障壁になり得る」という点である。古代から、紙ないし印刷物は、学術・文化における情報伝達の基盤として、極めて重要な役割を担ってきた。しかし、デジタル技術が進展した現代において、情報伝達の媒体としての印刷物は、すでにその絶対的地位を失っている。印刷物が社会的障壁となり得るものであることを理解し、心身の機能障害に合わせたより良い情報伝達の在り方を考えることは、PSとして、何より、現代社会を生きる者として、念頭に置くべきことである。

本活動班は次年度、上述した課題の解決を主目的として、活動を継続していく予定である。特に、校正済みテキストデータ作成の環境整備については、PSがデータ作成の主体となることが計画されている。今後も、本学の情動的・制度的アクセシビリティの向上に向けた活躍が期待される。

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
10/6	センターゾーン教室	キックオフミーティング	1人
10/28	中央図書館	第1回意見交換会	1人
12/5	オンライン	先行事例の聞き取り調査（筑波大学）	1人
12/15	中央図書館	第2回意見交換会	1人
	定例会	ミニレクチャー（1）	1人
12/22	定例会	ミニレクチャー（2）	1人
1/9	中央図書館	第3回意見交換会	3人
1/26	中央図書館	第4回意見交換会	3人
2/5	中央図書館	第5回意見交換会	2人
3/10	中央図書館	第6回意見交換会	3人

【荷物運搬サポート】

文責：平井実祐

1. 目的

電動車椅子を使用している学生に対し教室移動や授業準備、荷物の運搬等の直接支援を行い、物理的バリアを解消することを目的とした。

2. メンバー

上田、大野、平井

3. 活動内容

利用学生から支援の要望があった授業の開始前と終了後の10分程度で移動支援と授業準備、荷物の運搬の支援を行った。

移動支援では、電動車椅子で移動する利用学生に付き添い、必要に応じてドアの開閉や進路の確保等を行うことにより教室間のスムーズな移動ができるように支援した。併せて、車椅子と座席の間を移動する際には転倒等の危険がないように見守りを行った。授業準備では、利用学生が終了した授業の教材をバッグに片付け、次の授業で使用する教材を取り出して準備を行うことを支援した。荷物の運搬の支援では、利用学生が車椅子から座席、または座席から車椅子に移動する際に必要な教材等を運搬した。また、教室間を移動するときに利用学生から預かった荷物を持って移動した。

4. 活動の振り返り

支援を行う際は、利用学生と積極的にコミュニケーションを取るように心掛けた。話を丁寧に聞きニーズを把握し、利用学生が自分でできること、支援してほしいことを確認しながら支援を行い、過度な支援や不十分な支援とならないように留意した。

私はこの活動に従事し、以下の2点が印象に残った。1点目は、広い視野をもち、様々な所に気を配りながら活動を行うことの大切さである。活動初期の頃は利用学生の様子ばかりを気にかけてしま

い、周囲の人に対して注意を向けることがあまりできなかった。その結果、人の出入りが多い時間帯に狭い入り口を通ろうとする等して、利用学生にも周囲の学生にも迷惑や負担をかけてしまうことがあった。利用学生の様子を確かめながら適切な配慮を行うことは非常に重要である。しかし、それだけではなく周囲の環境に目を配ることも最適な支援を提供する上では大切であると気づいた。

2点目は、周囲の人の自然な支援の重要性である。活動中に、車椅子ユーザーに気づいた他の学生がドアを開けたまま保ってくれる等の手助けを行ってくることがあった。彼らは学生支援の3層モデルにおける第1層にあたるナチュラルサポーターに該当し、第2層にあたるPSと協力することで、より充実したサポートが提供可能であると実感した。したがって、PSとしての専門性を高めるだけでなく、日常生活においても周囲に手を差し伸べられるナチュラルサポーターとしての姿勢を自分自身も実践することで、より多層的な支援の形を広めていきたいと感じた。

荷物運搬サポート班の今後の課題としては、支援に入ることができるPSの人数確保が挙げられる。一概には比較できないが、昨年度と比べても活動に参加したPSの人数が減少しており、利用学生が合理的配慮を希望したにもかかわらず、実施できていない時間帯があったと考えられる。この背景には、活動の認知度が不足していることや現地でしか行えない支援であり都合のつくPSが多くないことが考えられる。今後は車椅子ガイドヘルプ研修を受講していなくてもこの活動に参加できること、活動時間は最短で10分程度で長時間の活動ではないことを周知したり、PSそのものの人数を増やす努力を行ったりすることで、支援に参加可能な人数を確保することが必要である。

表 1) 活動スケジュール

日程	活動場所	参加人数
2025 年 5 月～2025 年 6 月	伊都キャンパス	2 人
2025 年 7 月	伊都キャンパス	2 人
2025 年 12 月～2026 年 1 月	伊都キャンパス	1 人

詳細な活動時間は、利用学生の個人情報保護のため省略する。

【パソコンノートテイク（PCNT）班】

文責：吉村歩乃佳

1. 目的

音声情報を聞き取り、理解することに難しさがある学生を対象としてテイカーが音声情報を文字情報に変換し、対象学生の音声情報へのアクセスを保障する（情報保障）ことを目的として活動した。

2. メンバー

リーダー：重信まこ、林朋紘、白水愛彩、野中莉央、吉村歩乃佳

サブリーダー：なし

メンバー：延原、濱、上村、清田、鈴木、武内、武末、中島、三浦、秋武、江島、隈本、黒田、濱崎、福長、上田、大野、大森、瀧内、永野、日永田、荒瀬、梅崎、川村、河本、平井、福元、舟越、船越、松尾（果）、村川

3. 活動内容

上記授業・ゼミにて、各科目3～4名が担当した。授業がオンラインの場合はオンライン、授業が対面の場合は、対面にて支援を実施した。なお、対面授業の場合でもテイカーの活動場所の都合などにより、オンラインで支援を実施することもあった。支援後に振り返りシートを記入し、テイカー同士で共有すべき事項について話し合った。支援内容について話し合うことにより、今後の支援時のトラブルへの対応や文章の表記などについてテイカー内で共通認識を持つことができ、情報保障の質を高めることに繋がった。授業内容に応じて使用するシステムを変更した。通常の授業等では captiOnline 4、スクリーンショットを多用する場合は captiOnline 3、英語を扱う場合は音声認識アプリ UD トークを使用している。

PCNT 共同養成講座は、九州大学および九州内の他大学を対象にテイカーを養成することを目的として活動した。パソコンノートテイク（以下 PCNT）班のメ

ンバーが指導担当学生として指導を行った。講座内容は聴覚障害学生支援と聴覚障害の基礎知識や PCNT における文字表記、連係入力の体験や実践練習などを取り扱った。また、昨年度の講座内容に英文入力と前ロール作成を追加した。

PCNT 練習会は、PCNT の経験を増やすことを目的として12月より月1～2回ほどオンラインで開催した。YouTube の授業動画を使用し、captiOnline を使用した連係入力の練習と振り返りを行った。

なお、支援活動は以下の時間で行った。

前期

水曜授業：4限（3回）

研究室のゼミ：不定期

学位記授与式

入学式

新入生保護者説明会

後期

水曜授業：4限（2回）

研究室のゼミ：不定期

講座、練習会は下表参照

4. 活動の振り返り

各支援の振り返りの内容には他の支援でも役に立つ情報が多く記載されている。しかし、その支援を担当していないメンバーが全ての振り返りシートを見ることは少なく、改善点等の内容が他の支援に反映されにくい点が問題である。そのため、振り返りシートの周知が必要である。また、PCNT マニュアルを読みなおすことで支援前の不安を減らすことにつながったため、初めて支援に入るテイカーに対して案内していきたい。

今年度は授業での支援が減ったため PCNT の機会が少なかった。しかし、いつ支援の依頼が来た場合でも十分な支援

が行えるようにする必要がある。そのため、後期より PCNT 練習会を開始したが、実施する上で、オンラインでの練習の難しさが見つかった。特に、動画上の話者の声の聞き取りにくさなどの問題が

挙げられる。今後は動画を選ぶ際に聞き取りやすさに注意し、参加者が効果的に練習できる動画の選択を心がけたい。さらには、連携の取りやすさを考慮し、対面での練習会実施も検討したい。

表 1) 九州・沖縄地区国立大学ノートテイカー学生共同養成講座

日程	活動場所	活動内容	参加人数
8/27	オンライン	PCNT に関する知識及び実践の指導 (いずれも 9 時～12 時に実施)	9 人
9/3			9 人
9/10			10 人
9/17			9 人
2/25			10 人
2/27			10 人
3/2			10 人
3/5			10 人

表 2) PCNT 練習会

日程	活動場所	活動内容	参加人数
12/10	対面・オンライン	動画を使用した連係入力の練習	6 人
12/17			4 人
1/14			4 人

【発達障害学生支援】

文責：古瀬健心、森下はなの

1. 目的

修学上で困り感のある発達障害学生に対して、履修登録・申請手続き、スケジュール管理、課題・提出物管理などの援助といたった、直接支援を行う。

PS は、直接支援及びスーパーバイズ（以下、SV）をとおして、発達障害学生や社会的障壁についての理解を深めるとともに、様々な支援方法を知ることを目指す。また、大学が行うべき学生支援のあり方について、よりよい形態を思索する。

2. メンバー

延原、上村、武内、古瀬、秋武、白水、深堀、森下、川村

3. 活動内容

個人情報保護のため、詳述しない。

・A：毎週木曜日 13 時～14 時

日程	活動内容
4/8～8/20	履修登録・時間割作成・課題／スケジュール管理等
10/1～2/12	課題・スケジュール管理等

※2月13日現在

・B：毎週火曜日 13 時～14 時

日程	活動内容
7/7～8/4	時間割作成・課題／スケジュール管理等
10/27～2/17	時間割作成・課題／スケジュール管理等

※2月20日現在

・C：毎週水曜日 9 時～10 時

日程	活動内容
12/8～2/12	課題の確認・スケジュールの作成等

※2月20日現在

4. 活動の振り返り

①利用学生にとっての活動の意義

支援を通して、自身の困り感や、自分に合った工夫ややり方についての気づき

を得ることができたと考えられる。

②PS にとっての活動を通じた学び

支援開始初期、PS と利用学生で発達障害学生支援に対する考え方が異なっているという悩みに直面した。この課題に対し、利用学生が気持ちを話しやすい場の醸成を目指し、関わり方を工夫した。例えば、誘導的な言い方を避け、利用学生の意思を引き出す声掛けを行った。また、話を聞くときは分かったつもりにならないよう留意し、疑問を持ち、気になったことは素直に訊くように心がけた。

また、同じ学生である PS が支援に当たる意味を考え、実践することができた。ピアの意義として、話を丁寧に聴き、安全基地のようにどのようなことでも話せる存在を目指すことを確かめた。

③社会的障壁についての学び・気づき

1) PS にとっての意義

利用学生の話聞く中で、発達障害や発達障害学生にとっての社会的障壁について、具体的事例に即して学べた。また、支援の中で迷いや難しさを感じた経験から、自身の在り方や障害観について考えることができた。例えば、利用学生に対して発する上で躊躇う言葉があったとき、抵抗感があった理由を考えることで、自分が利用学生や発達障害学生に抱いているイメージに気づけた。

2) 大学にとっての意義

大学における制度の在り方について改めて考えることができた。例えば、合理的配慮申請自体のハードルの高さや、授業外でメールを送る必要があることなど、制度はあれども十分でないことがわかった。このような全体的な組織としての大学の在り方も、PS で考えていきたい。

④来年度に向けて

メンバー間で支援の中で感じたことを共有する機会を増やしたい。支援の多様性の理解を深め、支援に携わる PS 皆で、より良い支援について考え、支援がより良い場となることを目指したい。

表1) 活動スケジュール

対象学生	支援期間	担当 PS	実施回数および頻度
A	2025 年 4 月～2026 年 3 月	古瀬、深堀	支援 33 回 (週 1) SV 6 回 (月 1)
B	①2025 年 7 月～11 月 ②2025 年 12 月～2026 年 2 月	① 延原、武内 ② 延原、森下	①支援 6 回 (月 1) SV 6 回 (月 1) ②支援 11 回 (週 1) SV 3 回 (月 1)
C	2025 年 12 月～2026 年 2 月	白水、川村	支援 6 回 (週 1) SV 4 回 (週 1)

活動は全て IN 室内の PS ルームで実施した。

【バリアフリーマップ・設備改善班】

文責：我如古咲心

1. 目的

公共施設や教育機関においては特に、多様な障害種を想定したバリアフリーマップ（以下 BM）の作成が求められる。すべての人に対して機会の公正を担保することを目標とし、現時点では車いすユーザーをはじめ、主に身体障害者を対象とした BM 作成を進めている。

設備改善では、学内の施設・設備におけるアクセシビリティの現状を調査し、報告書にまとめ、大学と共有することで、アクセシビリティの向上を図る。

2. メンバー

リーダー：岩元凜

サブリーダー：隈本陽太弥、日永田涼葉、我如古咲心

メンバー：延原、上村、古瀬、森、北村、濱崎、松尾（和）、石田、大野、荒瀬、舟越

3. 活動内容

主に以下3つの活動を行った。

①伊都キャンパス実地調査・設備改善報告書作成

No.1 イーストスロープ（ビッグスカイ北西側） ★★★		
	→	
問題点 階段・スロープ上端に誘導用ブロック等の敷設がない	要望、改善案 誘導用ブロックを敷設をする	現状 改善無し。
要望：2022年3月 現状：2025年12月		

（図1）2025年度経過報告(抜粋)
イーストスロープ(ビッグスカイ北西側)

対象となる施設・設備が増加し PS の活動時間が不足したことから、本年度は新規調査を実施せず、経過報告書の作成

に注力した。経過報告書では、前年度の設備改善報告書で指摘した設備について改善の有無を中心に経過報告を行った。

報告書では、対象となる施設・設備 43 件を、改善の必要度および改善の容易さに基づき、以下の区分に分類した。

- ・設備改善の必要性が高い対象：13 件
- ・設備改善が望ましい対象：8 件
- ・劣化・損傷により機能が損なわれている対象：18 件
- ・運用上の注意により改善が可能である対象：2 件
- ・改修予定である対象：2 件

なお、「運用上の注意により改善が可能である対象」のうち 1 件は補修が確認されたが、それ以外は確認されなかった。

②馬出キャンパス実地調査

前年度の馬出キャンパス実地調査の結果を踏まえ、BM への反映に向けて再度実地調査が必要であると判断した箇所について、追加の実地調査を実施した。

③設備改善プラットフォーム作成

PS の視点のみでは網羅しきれない学内の物理的バリアを、一般学生が主体的に発見・報告できる仕組みを構築することを目的としてプラットフォームを構築した。具体的には、①公式 LINE、②LINE オープンチャット、③Google フォームの3つの報告手段を設け、全学共通メールを通じて全学へ周知を行った。その結果、2026 年 2 月 1 日現在、伊都キャンパス 7 件、馬出キャンパス 1 件、筑紫キャンパス 0 件の報告が寄せられた。また、公式 LINE と LINE オープンチャットを通じた報告は得られなかった。



(図 2) Google フォームを用いた
設備改善プラットフォーム

4. 活動の振り返り

本年度の活動では、伊都キャンパスの設備改善報告書と設備改善プラットフォームを作成することができた。

本年度、初めてサブリーダーを務めたことで、計画的に物事を進める力を身につけることができた。実地調査では、前年度までの画角では状況が把握しにくいと感じられた写真について、撮影方法を工夫し改善することができた。また、時間的余裕をもって設備改善報告書を作成できた。これにより、全学の障害者支援推進委員会での報告が円滑に進んだ。

一方で、伊都キャンパスの設備改善報告書で指摘された設備のうち、改善が確

認された件数は依然として少ない。そのため、どのように改善を促進するか検討することが今後の課題である。

また、本年度は定例会での班活動が実施されなかったこともあり、計画的に活動を進めることが難しかったと感じている。来年度は、具体的な計画を立てたうえで馬出キャンパスの BM 作成を完了させ、設備改善報告書を作成することを目標としたい。ただし、馬出キャンパスは病院施設であるため、立ち入りや調査が困難な箇所がいくつか存在する。そのため、完成度の高い BM を作成するには相応の時間を要すると考えられる。そこで、馬出キャンパスの調査を進めつつ、並行して大橋キャンパスにおいても実地調査を行い、設備改善に向けた取り組みを着実に進めていくことを提案する。

設備改善プラットフォームについては、報告数は少ないが、BM 班が把握していない貴重な情報である。今後は次年度に現地確認と写真撮影を行い、設備改善の重要度を判断し、毎年度末の設備改善調査報告書に加えることをルーティン化する。また、現在は 3 つのプラットフォームを同時並行で運用しているが、今後は利用状況やユーザーの声を踏まえ、より効率的な形へ一元化する。

表 1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
7/17	オンライン	設備改善プラットフォーム作成	4 人
11/10	中央図書館	前年度行った馬出実地調査の反映	6 人
11/26	PS ルーム	引継ぎ	3 人
12/8	伊都キャンパス	第 1 回伊都キャンパス実地調査	4 人
12/17		第 2 回伊都キャンパス実地調査	3 人
12/24	馬出キャンパス	第 1 回馬出キャンパス実地調査	5 人
12/25	伊都キャンパス	第 3 回伊都キャンパス実地調査	3 人
1/14		第 4 回伊都キャンパス実地調査	3 人
1/19	中央図書館	伊都キャンパス設備改善報告書作成	3 人

【VR・ルート探索アプリ】

文責：井上紡

1. 目的

学内の様子を車いすで撮影した VR ルート動画を作成・公開することにより、バリアフリールートが必要とする人への情報提供を行い、キャンパスを利用するすべての人の移動の安全を保障し、学内のアクセシビリティを向上させること。

九大伊都キャンパスを誰もが利用できるようにするために、またキャンパス内の安全な移動を保障するために、バリアフリーを考慮したキャンパス内の移動経路をアプリによって提供すること。

2. メンバー

リーダー：上田慶子

サブリーダー：井上紡、高木明日香

メンバー：延原、藤原、古瀬、三浦、森、内村、北村、山口、石田、上田、大野、吉村、梅崎

3. 活動内容

以前は VR 班とルート探索アプリ班が別々で活動していたが、2025 年度から統合された

①VR

まず、学内の利用者の多い経路について 360° カメラを用いて撮影した。次に、撮影した動画に映りこんでいる人や車のナンバープレートにモザイクを施し、公開動画の素案を作成した。その動画に対し PS から改善案を募集し、それらのフィードバックをもとに、改善を加え公開する動画が完成した（図 1）。

VR 動画の撮影・作成には九州大学データ駆動イノベーション推進本部次世代型オープンエデュケーション推進部門（NOE）の協力を仰いだ。

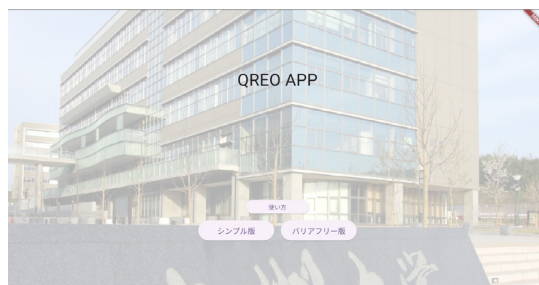


（図 1）VR ルート動画

②ルート探索アプリ

前年度より継続して、バリアフリーを考慮したキャンパス内の移動経路を提案する「ルート探索アプリ」の開発を行った。このアプリは障害の程度に応じてエレベーターなどのルートを提案する。

2025 年度はアプリの試用と改善を目標として活動を行った。アプリの実装とテストを目標として、バグの修正や UI のデザインなどのブラッシュアップを行った。



（図 2）ルート探索アプリ表示画面



（図 3）ルート探索アプリ画面

4. 活動の振り返り

VRについては、動画の撮影・編集などを経て、公開する動画を完成させることができた。作成した動画は九州大学のHPに掲載する予定である。作成した動画を公開することで、実際に利用者が視聴できるようになり、学内のアクセシビリティが向上していくことが期待される。

ルート探索アプリについては、前年度のものをブラッシュアップすることができた（図2・3）。どちらも様々な工夫

を行い、多くの利用者が使用しやすいものを作成した。

これからの活動においては必要としている人に動画やアプリの存在が届くように活動することが重要になってくると思われる。この活動を通して、キャンパスを移動する際にこのルートは安全かどうか様々な人の立場から考えるようになった。今後の展開としてはキャンパスのより広い範囲のさまざまなルートの動画を作成・公開していくことが考えられる。

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
5/29	伊都キャンパス	ミーティング	3人
6/02	定例会	VR 動画編集	5人
6/09		オープンキャンパスについての検討	7人
6/30		ルートの検討	5人
7/16	伊都キャンパス	文化祭についての検討	4人
7/25	オンライン	VR 動画編集	5人
8/1	PS ルーム	DX 本部との打ち合わせ	4人
8/5	オンライン	VR 動画編集	5人
10/06	PS ルーム	VR 動画編集	2人
10/17	PS ルーム	動画についての検討	2人
10/20	PS ルーム	DX 本部との打ち合わせ	6人
10/27	オンライン	VR 動画編集	6人
12/23	PS ルーム	コード引継ぎ	3人

【いふこプロジェクト】

文責：福元爽

1. 目的

いふこプロジェクトは、地域社会における障害の理解啓発や、次世代の共生社会の担い手となる人材の育成を目的としている。今年度は、佐賀県立小城高等学校との連携事業のもと、実施した。3年間の連携事業で今年度は最終年度である。今年度の活動では、小城高校の生徒が体験や対話を通して深く学ぶ機会にするとともに、身近な問題を主体的に見つけ解決策を模索することを目標とした。

2. メンバー

リーダー：武内悠、隈本陽太弥

サブリーダー：福元爽

メンバー：武末、古瀬、森、山田、秋武、内村、野中、福長、森下、大野、神谷、南里、吉村、荒瀬、我如古、川口、川村、河本、平井、舟越、船越、宮居、村川

3. 活動内容

今年度は小城高校との3回の交流会が実施され、それぞれに異なる目的が設定されていた。

第1回交流会では、九州大学伊都キャンパスにおいて、高校生が日常生活に潜む多様なバリアに気づき、障害への理解を深めることを目的とした。

第2回交流会では、小城高校で具体的なバリアの理解と支援の在り方を考えることを目的とした。

第3回交流会では、再び九州大学伊都キャンパスにて、最終成果物の完成に向けて、学びをまとめて発信につなげることを目的とした。

表1) 各回での詳細

第1回交流会	
車椅子・白杖	車椅子や白杖の利用体験、ガイドヘルパー実践を通じて、日常に潜むバリアへの気づきを促した。
障害者アート	九州大学伊都キャンパスの障害者アートを鑑賞し、8月の医療法人清明会障害福祉サービス事業所 PICFA（以下、PICFA）との共同制作に向けた関わり方を考える機会とした。
第2回交流会	
模擬授業	聴覚障害に関する基礎知識を教授し、どのような行動・環境がバリアになるかをグループで検討した。
相談	困りごとを相談しやすい環境づくりや対応方法をロールプレイで体験した。
学校探検	シナリオに沿って車椅子で校内を巡り、感じたバリアを共有した。
障害者アート	PICFAの方々と壁画の共同制作を行った。(図1)
第3回交流会	
模擬授業	聴覚障害に関するバリアとその除去についてさらに考察し、成果発表会用の啓発物作成を支援した。
相談	障害特性を学んだうえでKJ法による意見交換を行い、多様な背景への配慮の重要性を学んだ。(図2)
障害者アート	8月に制作した作品をより多くの人に伝えるため、キャプション内容を検討した。

4. 活動の振り返り

今年度は小城高校との3年間の連携事業の集大成のため、過去2年間の改善点を踏まえて、より主体的な学びを促進することを目指した。

交流会全体を通して、高校生に教える立場でありながら、実際は私たち自身が多くの学びを得る機会となった。特にグループワークでの、ある生徒の「身体障害者への配慮はもちろん大切だが、手伝う人が固定で決まっている場合、支援する側への配慮も必要」という発言は、支援を善意に頼らず全員で分かち合うという、持続可能な支援の在り方を再考させてくれた。また、高校生たちが心理的バリアに気づき、社会モデルの考えを自ら実践していた姿も非常に印象的だった。

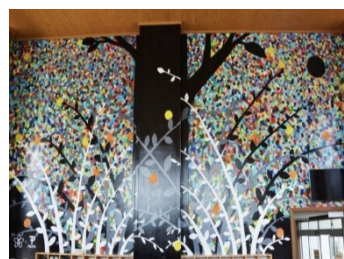
障害者アート班でも、PICFAの方々との連携を通じ、障害者アートの多様性やその背景を学んだ。表現活動を通じてともに楽しむという体験は、共生社会の実現に向けた大きな一歩であると感じた。

小城高校との連携事業は今年度で一区切りを迎えたが、3月13日には、これまでの学びの集大成としておぎすたいるリーダーが小城高校生に向けて成果発表を行った。

これまで障害について教わる立場であった彼らが、伝える立場として発信することは、本プロジェクトの目的である「次世代の共生社会の担い手」の育成の一つの成果である。

活動を通じて、参加学生の障害理解は大きく深まった。障壁は物理的環境だけでなく、コミュニケーションや社会的前提といった人的・社会的要因にも存在することや、個々の背景を踏まえた建設的な対話を重ねることで、相互理解が可能であることを実感した。

小城高校とのいりこプロジェクトを機に、今後もより多くの人々に障害理解を広げる活動を展開し、来年度以降も地域と関わる活動を継続し、共生社会の実現に貢献していきたい。



(図1) 小城高校で共同作成した壁画



(図2) KJ法を用いたグループワークの成果物

表2) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容 (簡潔に)	参加人数
6/2	定例会	第2回交流会活動内容検討	12人
6/3	伊都キャンパス	第1回交流会	19人
7/1	定例会	第2回交流会活動内容検討	11人
7/7	定例会		16人
8/2	小城高校	第2回交流会	12人
10/6	定例会	第3回交流会活動内容検討	18人
10/20	定例会		15人
10/27	定例会		17人
10/31	伊都キャンパス	第3回交流会	14人
3/13	小城高校	成果報告会	4人

【九大祭班】

文責：荒瀬泰珂

1. 目的

PS の周知や合理的配慮などを啓発する必要性を感じ、大学外部からも人が多く来る九大祭で活動をするために企画を考え、2026 年度の九大祭での実現を目指す。また、PS 内部でも度々実施希望の声があがっていたため、確実にするために活動班にした。

2. メンバー

リーダー：白水愛彩
サブリーダー：荒瀬泰珂、河本花楓
メンバー：延原、重信、隈本、深堀、松尾（和）
（メンバーは複数回参加者）

3. 活動内容

2026 年度九大祭で PS として出展する際の企画内容を話し合った。5 月に出展申し込みがあると想定されることから、今年度中の企画決定を目標にした。

4. 活動の振り返り

新規活動として、内容について 0 から 1 を生み出すのが難しかった。現在は色覚フィルターを通して見ることで道ができるゲームを検討している段階で、他サークルの学生に協力を仰いでいる。啓発するにしても様々な方法があり、どれが適切なのか目的と照らし合わせる必要があるが、目的に沿っているかわからなくなることもあった。目的に立ち返ることは大切だと実感した。当日が良いものになることを願う。

表 1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
12/22	定例会	概要説明	12 人
1/19	中央図書館	案検討	3 人
1/19	定例会	案出し	6 人
1/26	定例会	案出し	23 人
2/13	PS ルーム	形式決定	4 人
2/24	PS ルーム	新たなコラボ候補の検討	3 人
3/6	PS ルーム	コラボ案検討	4 人
3/27	オンライン	今後の方針決め	2 人

【啓発イベント班】

文責：梅崎愛子・高木明日香

1. 目的

学生および教職員、特にこれまで関心の薄かった層に、手話で注文するカフェ体験や多様なコミュニケーション方法を紹介するポスター展示を通して聴覚障害への理解を深め、より身近に感じてもらうことを目的とした。こうした体験により、聴覚障害を取り巻く心理的バリアの軽減を図り、最終的には聴覚障害に限らず、多様な特性をもつ学生が自分らしく過ごせるキャンパスづくりに寄与することを目指した。

2. メンバー

リーダー：佐藤理菜

サブリーダー：梅崎愛子、高木明日香

メンバー：延原、重信、古瀬、秋武、白水、石田

3. 活動内容

①イベント全体

本イベント「てとてカフェ」は、学生と教職員、特に聴覚障害に関心の薄い層を対象とし、聴覚障害について理解を深め、手話以外にも多様なコミュニケーション方法があること、そして聴覚障害者が日常で抱える困り感を体験的に知ってもらうことを目標とした。

堅い研修形式ではなく、誰でも気軽に参加できる雰囲気重視し、体験をきっかけに「気づく→学ぶ→実践する」という流れを生むことを意図した。具体的には、言葉を使わずに手話や指差しで注文するカフェ体験（日常の困り感に気づく）と、コミュニケーション方法や基礎知識を学べるポスター展示（学ぶ）を組み合わせた内容とし、これからの生活の中で自分に実践できることを考えてもらえるよう企画した。

イベント実施にあたり、立ち寄りやすさと飲食提供が可能であること考慮し、嚶鳴珈琲館と打ち合わせを重ねた上でコラボが決定した。

イベント当日は、PS がカフェブース・学びブース・呼び込みの3つの担当に分かれて活動した。店内では参加者に手話での注文方法を伝え、聴覚障害のある店員役（ヘッドホンをつけ、音が聞こえない状態）のPS に対して実際に注文する体験を実施した。リハーサル不足で嚶鳴珈琲館との連携がうまくいかず滞る場面もあったものの、約 50 名が来場し大盛況となった。アンケートでは「手話や聴覚障害に興味をもつきっかけになった」「想像以上に楽しかった」「聴覚障害者は全員手話を使うと思っていたがそうではないことに驚いた」など前向きな声が多く、目的であった「関心の薄い層に興味を持ってもらうきっかけづくり」を達成できたといえる。



（図1）手話での注文体験の様子

②カフェ担当

当日に参加者が見る、手話の単語帳と注文の流れの動画の作成を行った。また、注文に必要な手話を参加者に教えるために事前学習を行った。

③学びブース担当

学びブースは、参加者に聴覚障害についての知識を深めてもらう目的で設置した。形式は、PS がその場で説明を交えつつ見てもらうポスターと、参加者が自由に眺めることのできるクイズとした。ポスターでは聴覚障害とは何か、その種類や個人差について触れ、聴覚障害者やその周りの人には多様なニーズがあること

から、口話以外の多様なコミュニケーション方法の紹介へとつなげた。クイズは聴覚障害に関する豆知識や、気づきが得られるような情報を意識して作成した。



(図2) 当日使用したクイズの一部

4. 広報担当

イベントの広報として、告知のためのポスター制作およびカフェの予約フォームの作成・管理、嚶鳴珈琲館のInstagramでの広報依頼、SNS 班に PS のInstagramでの投稿依頼を行った。

4. 活動の振り返り

この啓発イベントは、聴覚障害に普段は関心を持たない学生および教職員に対して、聴覚障害を身近に感じてもらい、自分ができることを考えるきっかけとなることを期待して行った。

イベント後に参加者から収集したアンケートによると、SNS での広報を通じての参加以外にも、当日学内に掲示したポ

スターを見て参加したという参加者も多くいた。また、幅広い学年・学部の学生および大学職員が来店しており、様々な参加者に参加してもらえたと言える。

またそのアンケートでは、「手話というのはどこか遠い場所のものと感じていたが、今後機会があれば手話での会話に挑戦してみたい」などの前向きな感想を多くいただいた。

私自身が本活動をきっかけに手話を学び、手話でコミュニケーションを取る活動を通して、手話の楽しさがひしひしと感じられた。また、初めて手話に触れる参加者に手話を教えるという活動を通して、自分自身が参加者に教えた手話が店員役の PS に通じた時に喜びを感じた。また、より手話を勉強して、たくさんの人と手話で話せるようになりたいとも感じ、自らの成長のきっかけとなった。反省点は、準備の段階でリハーサルを行わず、当日に混乱が生じた点である。予想を上回る参加者にご来店いただいたこともあり、嚶鳴珈琲館の方と PS の連携がうまく取れていなかった。今後啓発イベントを実施する際は、コラボする団体と PS でリハーサルを行ったり、余裕を持って PS が手話を学んだりするなど事前準備を念入りに行って当日に臨めるとさらに充実したイベントになると思う。

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
10/6	定例会	イベント内容の検討	5人
10/20	定例会	イベント内容の決定	9人
10/27	定例会	どのようなカフェにするか話し合い	8人
11/10	定例会	各班に分かれて話し合い	7人
11/21	オンライン	学びブース打ち合わせ	3人
11/13	嚶鳴珈琲館	嚶鳴珈琲館と企画の打ち合わせ	3人
12/1	定例会	成果物へのフィードバック	11人
12/8	定例会	各班に分かれて話し合い	6人
12/15	定例会	当日の動きの確認	10人
12/17	嚶鳴珈琲館	啓発イベント	15人

【啓発物作成班】

文責：松尾果凜

1. 目的

本学における合理的配慮へのアクセシビリティ向上を目的として、合理的配慮制度に関する啓発ポスターの作成や、合理的配慮申請の流れをまとめた図を作成した。本活動は、合理的配慮の制度の存在自体は知っているものの、自分が取るべき行動が具体的に分からないため、申請に至っていない学生を対象としている。

2. メンバー

リーダー：大森日南子

サブリーダー：松尾果凜

メンバー：濱、林、鈴木、中島、内村、神谷、吉村

3. 活動内容

①活動全体

合理的配慮の制度の存在を「知る」ためのポスターは過去の活動で制作されたが、「合理的配慮についてどこに相談したら良いか分からない」という当事者の声が届いていることから、「知る」と「行動する」の間には大きなハードルがあると考えた。そこで行動のハードルを下げるために、学生としての私たちの視点を活かしつつ、合理的配慮実施までに必要なステップと情報が簡潔に示された媒体を制作することとした。

なお、今回の情報伝達ルートを「ポスター→流れ図」に設定した理由としては、ポスターは学生に対する声掛けのようにはたらき、学生が相談するきっかけを作る役割、流れ図は合理的配慮の手続きの見通しを簡潔に見せることで申請のハードルを下げる役割を、それぞれ想定したからである。

②啓発ポスター

「まずは相談から始めよう」というメッセージを伝えることを意図した。合理的配慮の相談についての心理的ハードル

を下げることを目的として、流れ図の上部に明確に提示した。また、この工夫に対し、実際に合理的配慮を受けている当事者学生から、「この文があると相談しやすい」という旨のフィードバックを受けた。ポスターのメインとなるイラストのデザインは、糸電話をモチーフにすることで、合理的配慮について気軽に相談できることを表現した点が特徴である。また糸電話をする対象となっている黄色い鳥は、風水で「幸福を招く鳥」ともいわれていることから、プラスのイメージを持たせるために使用した（図1）。

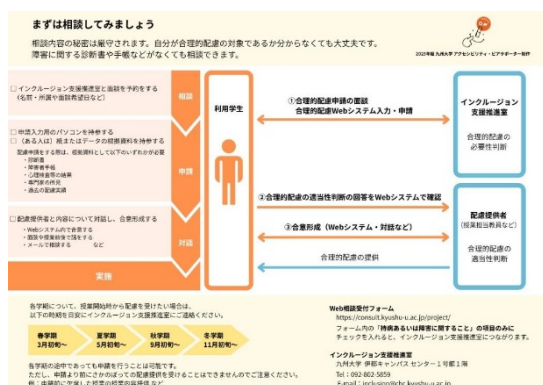


（図1）啓発ポスター

③合理的配慮申請の流れ図

既存の「九州大学における障がいのある学生に対する入学後の修学支援の流れ図」の特徴としては、網羅的であることが挙げられる。これにより、合理的配慮を受けたいと考えている当事者学生が実際にいつ何をすればよいのかが、視覚的にわかりにくい可能性があると考えた。

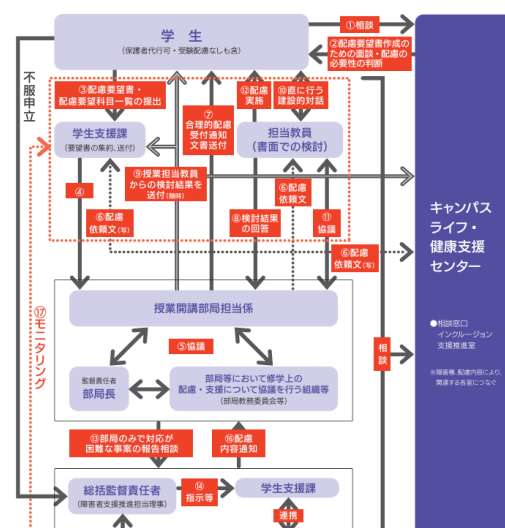
そこで、ポスター・流れ図の制作指針を踏まえ、これを学生視点で、簡潔に合理的配慮の情報を取得しやすいように再構成した（図2）。既存の合理的配慮の流れ図（図3）では、申請のステップにそれぞれ1~17までの番号が付されているが、学生の動き・大学の動きが区別されていなかった。そこで、初めに、流れ図を見る主体を学生に設定することで、合理的配慮申請時に学生がすべきことを強調して提示できるようにした。またこれに加え、学生の動きの表記の優先度を以下のように設定した。



（図2）合理的配慮申請の流れ図
※旧流れ図をもとに作成

学生の動き：横向きの矢印の向き、オレンジ色で統一して表記、左側に配置
大学の動き：青色で統一、右側に配置
また、既存の流れ図には基本的な流れ（1~12）と特別な流れ（13~17、不服申し立てなど）が区別されていないという問題があったため、「相談前に知る必要があるか」の観点で表記の優先度をつけ、基本的な流れ（1~12）のみを表記した。その際、基本的な流れを4つのステップ（相談・申請・対話・実施）に大別し、各ステップにおいて必要な具体的な動作を併記した。「相談」のステップにおいては「インクルージョン支援推進室と面談の予約をする」、「申請」のステップにおいては「申請入力用のパソコン（ある人は）紙またはデータの根拠資料を持参する」、「対話」のステップにおいては「配慮提供者と内容について対話し、合意形

成する」と記載した。また、見やすさの観点から、大別して左側は学生に関する情報、右側は大学に関する情報となるように文字と図を配置した。



（図3）旧合理的配慮申請の流れ図
※「九州大学合理的配慮ガイドブック」掲載

4. 活動の振り返り

本活動は合理的配慮へのアクセシビリティの向上を目的として行ったが、ポスターや流れ図の作成を通してわかりやすいデザインの手法を実践することができ、全体として自分たちにとっても学びのあるよい機会となった。

よかった点としては、啓発物のデザインを考案する際に、当事者の意見を取り入れることができた点が挙げられる。今後も啓発物を作成する際は、多様な視点を広く取り入れる姿勢を意識したいと思う。

反省点としては、スケジューリングが悪く、成果物の完成が締め切り直前になってしまった点が挙げられる。次回以降啓発物を作成する際は、早期に啓発物の形式を決定し、デザインとそのフィードバックを行う時間を複数回とることで、個人の負担を軽減するとともに、より質のよい啓発物が作成できるように心がけたい。

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
10/6	定例会	合理的配慮へのアクセスの周知法についての話し合い	5人
10/20	定例会	ターゲットと伝える内容についての話し合い	6人
続き			
10/27	定例会	食堂で投票イベントができるか否かの検討	5人
11/10	定例会	合理的配慮の仕組みの整理	7人
12/1	定例会	ポスターに載せる内容の選定	6人
12/8	定例会	ポスターの文言と図の変更	8人
12/15	定例会	学生がすべきことのリスト作成	6人
12/22	定例会	制作物をつくるためのグループ分け	6人
1/19	定例会	ポスターの原案についての話し合い	7人
1/26	定例会	ポスターと合理的配慮の図の修正	7人

【式典情報保障のメイキングビデオ作成班】

文責：野中莉央

1. 目的

本活動班は、九州大学の式典（今回は2024年度学位記授与式）の情報保障において、手話担当者及びリアルタイム字幕担当者のPSがどのように準備をして本番を迎えているのか、その裏側を撮影し、本番までの流れをまとめた動画を作成することで、学内外の啓発およびPSの周知を行うことを目的とした。また、式典での情報保障は、新入生への啓発やPS加入の動機づけにもつながる重要な取り組みである一方で、その裏側は十分に知られていない。そのため、準備過程を可視化し発信することには、情報保障の意義やPSの活動への理解を深める上で重要な意味がある。

2. メンバー

リーダー：野中莉央

メンバー：延原、重信、上村、武内、秋武、山口、石田、上田、吉村、川村

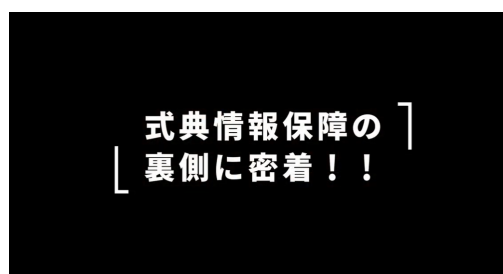
3. 活動内容

2024年度学位記授与式で、PSによって実施された式典情報保障（手話通訳・リアルタイム字幕）の準備から当日までの様子に密着し、状況が伝わるようにその裏側を撮影した。また、手話担当者、リアルタイム字幕担当者へのインタビューでは、当日に向けた準備・練習や活動の難しさ・やりがい、あるいは、情報保障を担当することへの思いや学生が情報保障を行うことの意義などを質問した。また、IN室の教員にもインタビューを行い、九州大学の式典に情報保障が導入されたきっかけや学生へ期待していることなどを尋ねた。

式典リハーサル・当日に撮影した動画や事前インタビューの内容をもとに、動画の構成案を作成し、その後編集を行った。

また、9月に東京で開催されたPEPNet-Japan シンポジウムにおいて本

動画を使用するために、ナレーションやインタビューの場面での手話通訳の挿入も行った。



(図1) メイキングビデオの場面(一部)

4. 活動の振り返り

本活動ははじめての取り組みということもあり、完成のイメージがなかなかつかない状態でのスタートとなったが、メンバーで動画の構成を練ったり、動画のカットや選定、文字起こし等を行ったりし、クオリティの高いメイキングビデオを作成することができたと感じている。しかし、最終的な編集は1名が行ったため、負担がかなり偏る形となったのが課題点である。

今後は、完成したメイキングビデオをPSのホームページや各種SNS、YouTubeチャンネル等で公開する予定である。これにより、情報保障の具体的な実践やその意義についての理解が学内外に広がり、PSの活動に対する関心の向上や新たな加入者の増加が期待される。また、今回作成した動画は、手話通訳・リアルタイム字幕の舞台裏に密着したダイジェスト版であったが、それぞれ素材となる動画は多いため、それぞれの情報保障に特化した、より詳細なメイキングビデオも今後作成し、学内外へ啓発を行っていきたいと考えている。さらに、啓発をより一層進めていくためには、継続的な情報発信に加え、視聴者にとって分かりやすい内容や発信方法の工夫、他の媒体や対面での活動との連携も重要であると考ええる。

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
2025/2/19	PS ルーム	第1回打ち合わせ (活動内容、スケジュールの確認)	4人
3/3	〃	第2回打ち合わせ (動画構成案検討)	6人
3/13	オンライン	手話担当インタビュー①	1人
3/14	〃	第3回打ち合わせ (質問内容検討)	3人
3/17	〃	手話担当インタビュー②	1人
3/19	PS ルーム	教員インタビュー	3人
〃	〃	第4回打ち合わせ (動画構成編集担当決定)	6人
3/21	オンライン	手話担当インタビュー③	1人
〃	PS ルーム	手話担当者事前練習風景撮影	1人
3/24	椎木講堂	リハーサル撮影	2人
3/25	PS ルーム	字幕担当者インタビュー	1人
〃	椎木講堂	式典当日撮影	1人
3/28	オンライン	第5回打ち合わせ (撮影動画確認)	7人
4/25	〃	第6回打ち合わせ (動画選定、編集動画担当割り決定)	5人
10/27	PS ルーム	第7回打ち合わせ (完成動画確認)	4人
11/17	〃	手話通訳動画撮影	2人

【ビブス作成班】

文責：石田華蓮、松尾和都

1. 目的

本活動は、IN 室のスタッフ及び PS が活動を行う際または、緊急時に着用するビブスのデザインを考案することを目的とする。

2. メンバー

リーダー：武内悠

メンバー：清田、白水、松尾（和）、石田

3. 活動内容

作成にあたり、IN 室からは、九州大学の PS、IN 室のスタッフであることがわかること、年度や季節に限らず、長く使えるデザインで、シンプルであることという注文を受けた。その指定を受け、①支援中、現地調査中などに着用し、PS が活動していることを周りに示すもの、②災害などの緊急時に着用し、IN 室のスタッフ（PS 含む）であることを示すもの、以上の 2 種類のビブスの作成を行った。仮デザイン案の作成では、①の PS 用は現地調査等で PS が活動しているということが見て分かるように、②の災害用は PS だけでなく IN 室職員も着用することを想定して、注文に従い各自でデザイン案を作成し Google ドライブで共有した。デザインの取りまとめについての話し合いでは、取りまとめに際して、それぞれのデザインへの意見を共有し、色合いやフォント、気づきスイッチの使用についての議論を行った。デザインについての協議・調整では、所属メンバーがそれぞれデザイン案を持ち寄り、それについてメンバー内で意見を出し合ったり相談したりしながらデザインの方向性を決めていった。最終的なデザインは図 1、2 のように、全メンバーのデザインを統合した形となった。

4. 活動の振り返り

今回作成したビブスを PS や IN 室スタッフが着用することで、PS が現地調査な

どの際、PS 間の仲間意識向上、周囲の人々に所属と活動内容を示すことで、PS 活動の知名度向上が期待される。次に、災害などの緊急時に IN 室スタッフ（PS 含む）が着用することで、IN 室関係者であることを明確に認識でき、組織的な連携や対応力の強化に貢献することが期待される。活動中の課題として、時間的制約によってオンラインで文字ベースの協議が中心であったため、物理的なサンプルや完成図の正確なイメージ共有が難しかった点が挙げられる。今後時間的制約に縛られずに検討する機会があれば、提案したデザイン案の意図やコンセプトを、メンバー間で共有、アピールする機会を設けることで、よりよい成果物を作成できると考えた。様々な障害種への配慮、デザイン面、コスト面など、多様な視点や意見を持つメンバー間での意見を一つの作成物にまとめるにあたって、傾聴力と提案力が養われたと実感している。個々のデザイン案の良い点を活かしつつ、IN 室からの指定条件を満たす落とし所を見つけるための議論と意見交換の重要性を学んだことは作成を担当した自身にとっての成長であったと考えている。来年度以降は、今回作成したビブスの、問題点の洗い出しと運用ルールの検討が必要であると考えている。耐久性、防汚性、緊急時用の夜間や悪天候下での視認性を高める反射材の配置など追加の工夫の検証と誰が、いつ、どのような状況でビブスを着用するのかの運用ルールを策定し、ビブスが最大限に活用される体制を整える必要があると考えられる。



(図 1) PS 用



(図 2) IN 室スタッフ用（緊急時用）

表 1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
11 月 19 日～ 11 月 25 日	オンライン	仮デザイン案の作成	5 人
11 月 29 日	対面・オンライン併用	デザインの取りまとめについ ての話し合い	4 人
12 月 1 日～ 12 月 10 日	オンライン	デザインについて協議・調整	5 人

【HP・SNS 班】

文責：川村菜絵、村川まなか

1. 目的

PS のホームページ（以下 HP）や、ソーシャルネットワークサービス（以下 SNS）を通して、PS の認知度・ウェブアクセシビリティの向上・多様性の理解の促進のため、啓発を行うことを目的とする。

具体的な例として HP では、PS 活動に関する情報の発信、古い情報の更新を行った。SNS では、PS 活動の広報に加えて、新規 PS の勧誘も行った。

2. メンバー

リーダー：武内悠

サブリーダー：川村菜絵、河本花楓、樋口珠希、平井実祐、村川まなか

メンバー：延原、梅崎、高木

3. 活動内容

今年度は HP、Instagram、X の 3 グループに分かれて活動を行った。

〈HP〉

既存の HP の削除項目、追加項目の検討を行った。また、情報を更新するために、各活動班のリーダーに活動紹介の依頼を行った。（図 1）HP に載せる写真を検討する際に、当該の写真に写っている PS 学生を掲載してもよいかの意思確認ができるよう、PS 学生基本調査を行った。

投稿内容については複数人でチェックを行い、アクセシビリティを担保できているか確認しながら作成を行った。

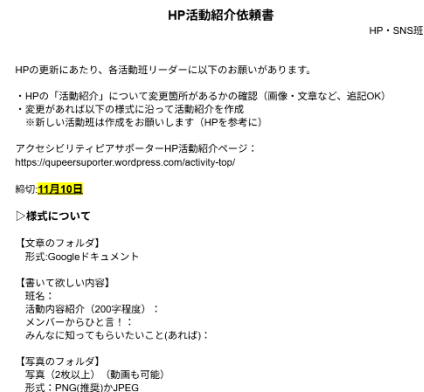
〈Instagram〉

Instagram の開設・運営を行った。PS 紹介を投稿し、PS に関する啓発を図った。また、啓発イベント班の「てとてカフェ」の告知を行った。

〈X〉

X は文章だけで投稿できるためすぐに情報を発信することができたり、ハッシュタグをつけた投稿が効果的であったりと、Instagram とは異なるメリットがある。現在は、既存の PS のアカウントの

権限を共有している最中である。毎週の定例会で各班が行ったことや、PS の新歓情報などを啓発するという方向性を決め



（図 1）HP 活動紹介依頼書

た。すでにフォロワーがいることを利用して、新規開設した Instagram との連携を取る計画を立てた。

4. 活動の振り返り

今年度の活動では、立てた計画のうち実行できた部分とできなかった部分があった。新規開設の Instagram については、PS がしていることを説明する投稿を行った（図 2）。他にも、合理的配慮をわかりやすく説明する投稿や、ストーリーズでの各班の活動の紹介を発信する予定だったが、投稿のための体制を十分に確立できておらず行うことができなかった。

投稿をしているもののフォロワーの獲得を十分にできていない。目的を達成するためには PS 活動についての投稿を増やしたり、九大のサークルや団体のアカウントとの繋がりや輪を広げたりする必要がある。X はアカウントの権限の譲渡に苦戦しており、HP は更新が必要な情報が残っているなどそれぞれの媒体で課題が残っている。HP・SNS の運用を活発的に行うことで、九州大学内だけでなく学外にも PS の存在を知ってもらえるという効果が期待できる。

私は Instagram の運用に関わっており、この活動を通して「フォロワーを増やすためにはどうすべきか」という新しい視点から SNS について考えるようになった。また、Instagram での投稿の作成の際には情報を取捨選択する必要があり、わかりやすく簡潔にまとめる方法について考えるようになった。

活動を発展させるために、HP の情報を更新し続けることや、九大の団体の SNS と繋がるなど様々な活動ができる。伝えられる情報の幅と対象とする人の範囲を大きくすることが必要である。



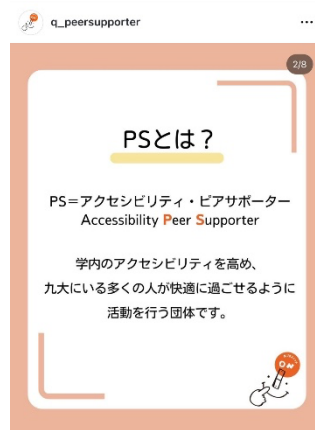
(図 2) PS の Instagram アカウント

<PS の HP>

<https://qupeersuporter.wordpress.com/>

<Instagram>

https://www.instagram.com/q_peersupporter?igsh=MTgwN2xnd3Zka2Z4aw%3D%3D&utm_source=qr



(図 3) PS についての投稿

表 1)活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
4/16	オンライン	活動の検討	1人
5/8	オンライン	活動の検討	1人
10/8	中央図書館	今後の活動の検討	6人
10/14	中央図書館	打ち合わせ	7人
10/23	PS ルーム	打ち合わせ	6人
11/6	PS ルーム	打ち合わせ	5人
11/25	PS ルーム	先生との話し合い	5人
12/1	1306 教室	アカウント権限の共有	5人

【補助犬フレンドリーキャンパス班】

文責：古瀬健心

1. 目的

学生・教職員の補助犬に関する知識・認識を高め、補助犬ユーザー・補助犬ユーザーではない人双方の心理的バリアを低減することを目的とする。九州大学では補助犬の受け入れ実績がなく、構成員（学生・教職員）の理解も十分ではない。これまでPSでは補助犬受け入れに関するウェブページや教職員向けマニュアルを作成してきた。そこで今回、九州盲導犬協会に協力していただきタイアップを行うことで、本学の構成員が補助犬についての理解を深められるようなイベントを実施した。補助犬を取り巻くさまざまなバリアの低減につなげ、多様な学生にとってより快適に共生できるキャンパスづくりに貢献することを目指した。

2. メンバー

リーダー：武末愛理、古瀬健心
サブリーダー：瀧内杏莉
メンバー：延原、三浦、清田、鈴木、武内、森、秋武、佐藤、白水、福長、森下、石田、岩元、大野、南里

3. 活動内容

今年度は、昨年度末に悪天候のため中止になったイベント企画の再検討を行い、4月28日に実施した。

イベントは「補助犬フレンドリーデー」と名付け、以下の企画を実施した。

まず、九州盲導犬協会とのマネジメントを行い、九州盲導犬協会の方に盲導犬の仕事のデモンストレーションを行っていただいた。

次に、補助犬の種類をはじめとする基礎知識をつけてもらうことを目的とした活動を実施した。具体的には、まず、補助犬に関するクイズを作成し、参加者に解いてもらった。さらに、昨年度までにPSで作成していた補助犬リーフレットとともに補助犬について誤解しやすいことをまとめた補助犬チェックリストを作成

し、来てくださった方に配布した。

以上の活動で学んだこと、考えたことを表現する機会として、寄せ書きの形で模造紙に書いてもらうブースを用意した。これにより、学んだことを個人で振り返ってもらう機会にしてもらうとともに、学んだことを参加者同士、またはPSと共有できるようにした。加えて、アンケートを行い、イベントを通して参加者が学んだことを知ることができるようにした。アンケートは選択式と自由記述式のものを組み合わせて作成し、17名から回答を得られた。

上記に加えて、視覚障害者の立場に立って考えるきっかけとして、アイマスクをして、ガイドヘルプを使って移動してもらう、視覚障害者ガイドヘルプ体験を行った。



(図1) イベント当日の様子

4. 活動の振り返り

反省点としては、クイズ、寄せ書きブースをうまく機能させることができなかったことが挙げられる。このブースはテントの中に設置したため、ブースの様子が外から分かりづらくなってしまった。そのため、補助犬デモンストレーション後になかなかブースを利用してもらうことができなかった。事前にブースの目的を明確にし、PSの動きの確認を丁寧に行っておくべきだった。とはいえ、クイズは補助犬に関する基礎的知識をつけて

もらい、誤解を減らすことができた。寄せ書きでは参加者にアウトプットする機会を設け、PS とコミュニケーションをとってもらうことができた。

総じて、補助犬のデモンストレーションは、授業の休み時間だったこともあり、多くの人に見てもらうことができた。センターゾーンの建物の間で行ったことで、足を止めてみてくれる人だけではなく、通りすがりに見てくれた人も多かった。アンケートでは、補助犬を積極的に受け入れたいと思った、という感想を多くいただいた。また、イベントを通

して補助犬に対して賢いといったポジティブなイメージを持ったという意見もいただけた。イベントによって、補助犬について多くの人に知ってもらうことができたのではないと思う。

今後は、次の段階として、実際に九大で補助犬受け入れをするにあたって、問題になることとその解決策を学校全体で検討するための活動を行いたい。そして、補助犬に関する学内のバリアを低減させ、実際に学内に補助犬を受け入れることができる環境を整えていこうと思う。

表 1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	人数
4/15	自宅	打ち合わせ	2人
4/24	センターPS ルーム	打ち合わせ	4人
4/28	センターゾーン	補助犬フレンドリーデイ	12人
4/30	センターPS ルーム	イベント振り返り	8人

【60秒でわかる合理的配慮】

文責：大森日南子

1. 目的

九州大学の教職員を対象に、合理的配慮の要旨を伝えることを目的として動画作成を行った。作成した動画では合理的配慮の要素のうち、必要性和適当性の判断と、合理的配慮と公平性の関係の2点を、合理的配慮について疑問点が生じやすいテーマとして取り上げた。

2. メンバー

リーダー：大森日南子

メンバー：濱、鈴木、中島、林

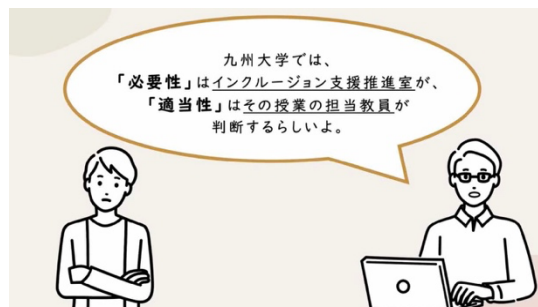
3. 活動内容

九州大学の教職員を対象に、合理的配慮の要点を伝える動画を作成した。まず九州大学が提供する合理的配慮の仕組みの把握や現状の整理を行った。その後、教職員の方々が視聴するという点を踏まえて、セリフの文言と表記の調整を行った。

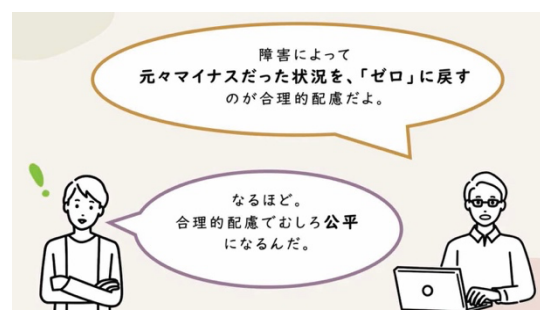
動画の台本とスライドは2024年度の活動で作成されたものを引き継いで使用した。台本についてはセリフの趣旨を検討し、より伝わりやすい言い回しとなるように変更を行った。スライドのセリフ表記については、意味の区切りに合わせて改行する、読みやすいフォントと行間に調整する、キーワードを太文字にするなどの変更を行った。

動画の作成にはオンライン会議ツールの画面録画機能を用いた。スライドの執行に合わせて2名がセリフ音声吹き込んだ。録画とそれを踏まえた台本とスライドの修正を3回行った。

完成した動画タイトルは「ワンポイント！合理的配慮～「適当性」編～」とした。動画の構成は以下2点である。①必要性（IN室が判断）と適当性（教員が判断）について。②合理的配慮の実施目的と公平性について。



(図1) 必要性和適当性



(図2) 合理的配慮の実施目的と公平性

4. 活動の振り返り

合理的配慮の要旨を整理することが、合理的配慮実施までに必要な手続きを具体的に把握する機会となった。これに関して、合理的配慮の手続きにおいて、学生や教員、また調整部署などの間で生じる合理的配慮の認識のずれの気づきを得た。

活動中、制作条件が変更される場面があった。今後、制作活動を引き継ぐ場合は、制作条件や制作物で達成すべき事項を明記すること、またこれらに優先度をつけて引き継ぎを行う必要がある。

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
6/2	定例会	引き継ぎ内容の確認	5人
6/9	定例会	ストーリーの主軸を検討	5人
6/16	定例会	動画の作成方針と音声の検討	3人
6/23	定例会	スライドの作成と録画(1回目)	4人
6/30	定例会	スライドの修正と録画(2回目)	5人
7/7	定例会	スライドの修正	5人
7/14	定例会	スライドの修正	4人
8/1	共同製図室	録画(3回目)と活動の振り返り	4人

いずれの活動も、大橋キャンパス共同製図室にて行った。

【わたし色と班】

文責：武内悠、大野小春

1. 目的

いかなるセクシュアリティの人も過ごしやすい大学にという目的のもと、本学における現状の調査とともに、研修・啓発などの活動を通して、学内のセクシュアリティに対するバリア解消を目指す。

2. メンバー

リーダー：武内悠、大野小春

サブリーダー：川口ひなた、舟越ちなつ、船越春花、宮居里凧

メンバー：上村、清田、藤原、野中、濱崎、森下、石田、伊牟田、永野、日永田、井上、梅崎、我如古、川村、樋口、福元、村川

3. 活動内容

前期には、セクシュアリティに関する活動を、PS として行うための研修を行った。以前まで、セクシュアリティに焦点を当てた活動がほとんど行われていなかった。そこで新しく活動を始めるために、まずは PS への研修を行った。

後期からは、調査・研修・啓発・研修会・Ally バッチの5つの班に分かれ、活動を行った。セクシュアリティに関する学内調査の作成、PS に向けた2回のミニレクチャーと九大セクマイサークル arcus と協同の研修会、セクシュアリティの基礎知識を主題とした SNS 投稿の作成、Ally バッチの制作にも取り組んだ。



(図1) Ally バッチのデザイン

4. 活動の振り返り

この班は本年度より創設された。前述したとおりセクシュアリティに関する活動がほとんどなかった。しかし、PS は「九州大学における物理的・情動的・制度的・心理的アクセシビリティの向上及び障害学生支援等を行う」団体であるため、障害以外の特性で困難が生じているものへのアクセシビリティを向上させる活動をするべきだと考えた。その中でも、今年度よりセクシュアリティに関する特性について焦点を当てた。主な理由としては、当事者が多いこと、PS 内でもセクシュアリティに関する配慮等が欠けていることなどが挙げられる。そして、今まで PS が焦点を当てなかった障害者以外の多様な人の人権を尊重していく団体へと変わっていくことも理由である。

前期でのミニレクチャーでは、セクシュアリティの構成要素や、SOGIE、心理的バリア、九大の制度的バリアなどについて講義を行い、知識の獲得を目指した。結果として、自らが生み出していたバリアに気づき、バリアをなくそうと行動した PS や、当事者にとって何がバリアになっているのかを深く考えようとする PS もいた。しかし、使用する敬称などを変更する等の行動変容も、研修後の一時的なものにすぎなかった人や、全く変容が無かった人もいた。PS であっても、自分には関係ないことは、自分事として捉えられなかったり、そもそも PS などの自分が所属している集団には当事者はいないと認識していたりする人がいる可能性が推察された。

後期からは、いかなるセクシュアリティの人でも過ごしやすい大学の実現を目指し、学内の現状把握に向けた基盤づくりと具体的な啓発活動の両立を焦点とした活動を行った。班体制を整え、それぞれの取り組みによって、実態の可視化と意識変容の双方に働きかける取り組みを

進めた。学内調査の設計は、過ごしづらさを抱える人の声を反映するための重要な準備段階となった。また、ミニレクチャーや研修会を通じて、当事者の経験や視点に触れる機会を設け、また SNS 投稿の作成や Ally バッチの制作によって、学内における環境整備に向けた準備を行ったことは一定の成果である。特に、九大セクマイサークル arcus の方々と協同して、研修会を行えたことはとても貴重な経験になった。当事者が身近にいることを実感できた点に加えて、Nothing

About Us Without Us の考えのもと、当事者と一緒に議論することが重要であることを改めて気づくことができた。

活動の全体において、対話の機会を意識的に設けることで、単なる知識に留まるのではなく、普段の自身の言動にまでつなげられるような活動作りを心がけた。今後は、調査の実施と分析を進め、その結果を具体的な提言や制度改善へとつなげるとともに、研修の体系化や他団体との連携を強化し、継続的な取り組みへと発展させていきたい。

表 1) 調査班活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
10/10	PS ルーム	調査目的の検討	6 人
10/15	理系図書館	調査項目の検討	5 人
10/20	中央図書館	他大学の事例調査	7 人
11/10	定例会	調査項目の検討	7 人
11/14	中央図書館	調査項目の検討	4 人
11/17	中央図書館	先生との打ち合わせの事前準備	2 人
11/18	PS ルーム	先生との打ち合わせ	3 人
11/21	オンライン	調査項目の再検討	2 人
11/28	中央図書館	調査項目の修正	4 人
12/2	伊都キャンパス	班全体の打ち合わせ	3 人
12/5	中央図書館	調査項目の検討	3 人
12/8	中央図書館	修正内容の整理	2 人
12/8	定例会	調査項目の修正	5 人
12/11	中央図書館	調査フォームの作成	4 人
12/15	定例会	調査内容の共有	5 人
12/22	伊都キャンパス	先生との打ち合わせ	2 人
12/22	定例会	修正を受けての項目検討	5 人
1/8	中央図書館	調査資料の作成	2 人
1/19	中央図書館	調査方針の調整	2 人
1/19	定例会	追加調査の検討	6 人

表 2) 研修班活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
10/10	定例会	研修の目的検討	7人
10/14	中央図書館	第1回研修の内容検討	5人
10/22	PS ルーム		5人
11/12	オンライン		6人
11/14			2人
11/18	PS ルーム	先生との打ち合わせ	2人
11/19	PS ルーム	第1回研修に関する先生との打ち合わせ	3人
12/2	伊都キャンパス	班全体の打ち合わせ	4人
12/8	定例会	第1回研修の内容検討	7人
続き			
12/12	オンライン	第1回研修の検討	5人
12/14	オンライン	第2回研修の内容検討	5人
12/15	定例会	第1回研修の修正	4人
12/18	オンライン	第1回研修の修正	3人
12/19	オンライン	第1回研修の確認	4人
12/22	伊都キャンパス	第2回研修の内容検討	6人
12/22	定例会	第1回模擬研修の振り返り	6人
12/23	伊都キャンパス	第1、2回研修の検討	3人
12/24	オンライン	第1、2回研修の確認	4人
1/19	定例会	第1回研修の実施・振り返り	7人
1/22	伊都キャンパス	第2回研修の修正	4人
1/26	定例会	第2回研修の実施	7人

表 3) 啓発班活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
10/15	伊都キャンパス	投稿計画と内容検討	5人
11/7	伊都キャンパス	投稿内容の共有・計画	6人
11/10	定例会	投稿作成方法の共有	7人
11/18	PS ルーム	先生との打ち合わせ	2人
12/2	伊都キャンパス	班全体の打ち合わせ	2人
12/8	定例会	作成方法と形式の検討	6人
12/15	伊都キャンパス	投稿内容の検討	4人
12/15	定例会	投稿形式の共有	5人
12/22	定例会	投稿数の検討	4人
1/19	定例会	投稿に関するアンケート作成	5人
2/28	オンライン	投稿内容の修正	7人

表4) 研修会班活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
12/3	PS ルーム	研修会の目的決定	6人
12/8	伊都キャンパス	研修会の内容検討	5人
12/11	伊都キャンパス		6人
1/14	中央図書館		5人
1/16	オンライン		4人
1/19	定例会		7人
1/21	伊都キャンパス		3人
1/23	PS ルーム	先生との打ち合わせ	3人
2/4	PS ルーム	九大セクマイサークル arcus との打ち合わせの事前準備	2人
2/10	オンライン	研修会の内容検討	4人
2/12	伊都キャンパス	九大セクマイサークル arcus との打ち合わせの事前準備	2人
2/12	P S ルーム	九大セクマイサークル arcus との打ち合わせ	2人
続き			
2/13	伊都キャンパス	研修会の資料作成	6人
2/13	伊都キャンパス	研修会の内容調整	4人
2/16	伊都キャンパス	研修会のリハーサル	8人
2/16	伊都キャンパス	研修会の実施	9人

表5) Ally バッチ班活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
6/30	オンライン	デザイン第1案試作	1人
12/11	オンライン	バッチ提案書作成・提出	1人
12/19	オンライン	デザイン第2案作成	5人
1/23	PS ルーム	バッチ作成	5人
1/30			6人
2/6	オンライン	配布計画書作成	1人

【車椅子ガイドヘルプ講座】

文責：船越春花

1. 目的

肢体不自由に関する基本的な知識の習得と、車椅子を用いた移動介護の基礎的技術の習得を目的とする。全身性障害者の多様なニーズに対応したサービスを提供するため、移動の介護に関する知識と技術を習得することにより、障害を持つ方々の社会参加の支援等が適切に提供できるスタッフの育成を目的とする。2日間とも受講した者には修了証が交付され、福岡県ガイドヘルパー名簿に記載される。ガイドヘルパーとして登録すると、学内だけでなく地域においても移動介護従業者として活躍できる。

2. メンバー

メンバー：山田、藤田、荒瀬、梅崎、川口、河本、高木、平井、船越、宮居、村川

3. 活動内容

9月30日は、「ガイドヘルパー研修テキスト 全身障害編」に沿った講義を受けた。第1章「移動支援サービスに関する基礎知識」では、ホームヘルプサービス制度と移動支援サービスの概要とガイドヘルパーの職業倫理について学習した。第2章「障害者福祉の制度とサービス」では、障害の概念と定義、障害者の現状、障害者福祉の基本理念、障害者福祉の最近の動向、障害者総合支援法による障害者保健福祉施策の概要、障害者年金等について学んだ。第3章「障害・疾病の理解」では、脳性まひや脳炎、脳血管障害、頸椎後縦靱帯骨化症、腰椎脊柱管狭窄症などの疾患、さらに言語障害とコミュニケーションについて学習した。第4章「障害者の心理」では、中途障害者、先天性障害者、家族それぞれの心理、障害者を取り巻くバリアについて理解を深めた。第5章「移動介助の基礎知識」では、全身障害者への接し方、全身性障害者の社会参加、姿勢保持、車椅子

や装具等の理解、外出に向けた移動介助の心がけ、事故防止に関する心がけと対策を学習した。講義の最後には、伊都キャンパス内で車椅子の移動介助を実践し、段差やスロープでの移動を体験した。

10月1日は、テキストに沿って介助方法を学び、実習を行った。第6章「移動介助の基本技術」では、抱きかかえ方および移乗の方法、車椅子の移動介助を学んだ。第7章「生活行為の介助」では、食事の介助方法を学習した。その後、食事の介助、除圧、車椅子での段差越えの実習を行い、最後に屋外で車椅子の移動介助を実践した。段差や坂、横断歩道など、実際の環境での移動方法を体験しながら学ぶことができた。

4. 活動の振り返り

障害の概念と定義を学ぶ中で、医学モデルと社会モデルの両方を含むICF（国



(図1) 車椅子での段差超え

際生活機能分類) について知った。これまで二つのモデルを分けて考えていたが、新しい視点を得たことで障害の捉え方の幅が広がった。また、ノーマライゼーションやソーシャルロールバロリゼーションといった概念を習い、障害のある方々の社会参加を支えるために自分が何をすべきか考えるきっかけになった。各障害や疾病の症状に応じた注意点を学び、利用者の安心を第一に考え、利用者

に合わせて適切な対応をすることが重要だと理解した。言語障害のある方とのコミュニケーションでは、表情、視線、仕草などの非言語的情報に気をつけて意思を汲み取り、自分自身の非言語的情報も見られていると意識することが必要だと学んだ。また、利用者の意思を尊重し、利用者主体で介助することが必要だと学んだ。利用者の方ができることを本人に任せつつ、外出が訓練のようにならないよう、本人の目的に合わせて介助することが大切だと分かった。また、バイスティックの7原則（個別化、意図的な感情表出、統制された情緒的関与、受容、非審判的態度、自己決定、秘密保持）を学び、信頼関係を築いて利用者の方が安心して介助を受けられるようにする重要性を理解した。また、テキストに記載された具体例などを通して中途障害者、先天性障害者、家族それぞれの心理をより身近なこととして理解することができた。実習では、介助される側を体験することで利用者の視点で介助の基礎の重要性を実感した。食事の介助では、誤った姿勢

で上を向いてゼリーを飲み込む体験をし、飲み込みにくさを体感することで、正しい姿勢で介助する必要性を学んだ。除圧の実習では、臥位で動かずにいることで圧力の負担を体感し、除圧の重要性を理解した。車椅子で大きな段差を越える実習では、車椅子が大きく傾くと不安を感じることを実感した。そのため、動作前の声かけや手際のよい操作が必要だと分かった。屋外での移動介助では、周囲の視線や段差での揺れを体験し、車椅子利用者の方の感覚を理解することができた。段差を通る際には揺れを最小限にすることを心がけたいと感じた。

介助には、利用者の方への適切な接し方や車椅子操作の技術など、多くの知識や技能が求められる。そのため、今後も自主的に復習を続け、理解を深めていく必要があると感じた。学んだことを活かし、様々な背景をもつ方々を理解し尊重しながら、その人らしい生活の実現に携わっていきたい。また、利用者の方々との関わりを通して、これからも学び続けていきたいと思う。

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
9/30	伊都キャンパス	基礎知識の講義受講	11人
10/1	福岡市市民福祉プラザ 介護実習室	移動介助の実習	11人

【ゲートキーパー研修】

文責：深堀由倫香

1. 目的

ゲートキーパーとは、悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を傾聴し、必要な支援につなぎ、寄り添いながら見守ることができる人のことである。自殺対策のために、行動を起こすことができるゲートキーパーの養成を目的とする。

2. メンバー

受講生（修了生）：黄、延原、重信、上村、清田、鈴木、武内、古瀬、本岡、森、山田、隈本、黒田、佐藤、白水、野中、濱崎、深堀、福長、藤田、森下、石田、江口、瀧内、友岡、永野、馴松、南里、日永田、荒瀬、井上、梅崎、我如古、川口、川村、河本、樋口、平井、福元、舟越、船越、松尾（果）、宮居、村川

3. 活動内容

本研修は人間環境学研究院・森陽平先生による講義型で行われた。まずゲートキーパーの4つの役割「変化に気づき声をかける」「じっくりと耳を傾ける」「支援先につなげる」「温かく見守る」が示され、いずれか一つでも習得できるように講師による研修が行われた。その後講師からそれぞれにおける注意点を教わり、声のかけ方や傾聴の仕方、見守り・支援の仕方を学んだ。講義の中で悩んでいる人に対してどのような声掛けをするかを自分たちで考える時間や、事例を見てどのようなかわり方が適切であるかを近くの人と検討する時間があり、身近なこととして現実的にイメージして対応を考えた。

さらに自殺者数の推移や背景、自殺を防ぐ要因を学び、自殺の現状や予防についてさらに詳しく把握することができた。

最後にはゲートキーパーとしての過ごし

し方も学び、悩んでいる人に対して行動を起こすためにはゲートキーパー自身が安全・安心に、健康で過ごすことが大事であると分かった。

活動日程等は以下のとおりである。

日程：11月17日

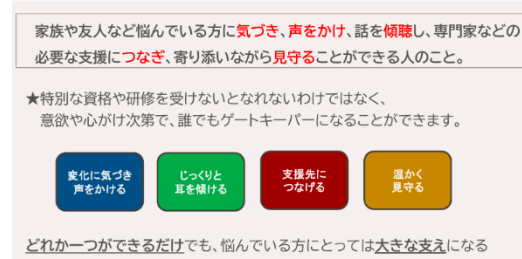
場所：伊都キャンパス

参加人数：45人

4. 活動の振り返り

ゲートキーパー研修を受けて普段ではあまり考えることのない、悩んでいる人に対する話の聞き方や態度などを改めて考える機会になった。普段のコミュニケーションとはまた異なるコミュニケーションの仕方について事例を踏まえて考えることができ、実際の場面をイメージして自分事として考えることができた。特に傾聴の部分は普段のコミュニケーションと大きく違う部分であると感じ、受容や共感的な視線、自己一致をしながら話を聞いていくことは難しいことがある一方で、重要なことであるのだろうと考えた。

現在はPSの活動としてゲートキーパー研修が行われているが、大学全体として実施することも必要だと考えられる。大学全体における自殺予防や支援につながると考えられるため、ゲートキーパーについてより広く定期的に学ぶことが重要だと考えられる。



(図1) ゲートキーパー研修資料

【研修班】

文責：秋武百華

1. 目的

新規 PS が PS 活動における基本的知識である合理的配慮や各障害について、理解することを目的とする。活動班に参加する際に必要な知識や支援を行う際のスキルを習得することを目指す。また、継続 PS は、指導を行う中で、これまで培ってきた知識・技術をアウトプットする中で振り返り、より良い支援・活動を行うための気づきを得ることを目的とする。

2. メンバー

リーダー：白水愛彩

サブリーダー：なし

メンバー：黄、重信、武内、秋武、隈本、福長、松尾（和）、石田

3. 活動内容

新規 PS を対象に、ガイドヘルプの研修を修了した PS が研修を実施した。内容は研修班に所属する 4 名の EPS が決定し、資料作成を行った。当日は、実技などで指導を行う PS を募り、座学・実技を合わせた研修を行なった。

初回の内容は、各障害種の定義・困り感や合理的配慮について説明を行い、それぞれの障害種で必要となる合理的配慮についての理解を促した。合理的配慮を考える上で重要となる建設的対話や個人情報取り扱いについても補足した。また、PS 活動にはどのようなものがあるか、活動に必要な提出書類の記入方法についても説明を行った。2 回目の車椅子ガイドヘルプでは、車椅子を利用する要因となる肢体不自由や車椅子ユーザーの心理的問題についての座学を行い、後半では、車椅子の構造や介助の方法について実践を交えながら説明を行った。実際に、新規 PS 同士でペアを組み、ガイドヘルパー・車椅子ユーザーを体験（図 1）することで、介助技術の獲得や緩やかな傾斜でも恐怖を感じるなどの心理的

問題についても理解を促した。また、今年度は実際に車椅子ユーザーである PS によるレクチャーを行い、より車椅子ユーザーのニーズに即した支援について考えることができた。3 回目の視覚障害者ガイドヘルプでは、視覚障害の概要や見え方の多様性、基本的な介助方法について説明を行った。実際に新規 PS 同士で弱視体験メガネを装着した弱視の体験やガイドヘルプの実践を行い（図 2）、視覚障害のある人にとっての学内での社会的バリアについても理解を深めた。2・3 回目のガイドヘルプの研修では、ガイドヘルパーとしての心構えや、ガイドヘルプの役割についても説明を行い、学内でガイドヘルプが必要となった際に対応可能な知識・技術の獲得を目指した。



（図 1）車椅子ガイドヘルプ体験の説明

視野狭窄

- ・前の様子と下の様子を同時に見る事が出来なかったので、荷物に多く引っ掛かり危ないと思った
- ・階段はガイドする側でもされる側でも難しかった
- ・どこまで説明するかの塩梅が難しかった
- ・白杖の先で床の感触がわかる
- ・椅子や床に置いてある荷物など障害を感じた
- ・ガイドヘルパーの肩を持った時にとても安心した
- ・壁をつたっての階段の上りは自分が思うよりゆっくり動く
- ・視野が狭いので首を動かさないと見えない
- ・階段の残りの段数を言ってもらえて安心感があった
- ・視野の範囲が狭く、顔を大きく動かす必要がある

（図 2）視覚障害体験の気づき

4. 活動の振り返り

継続 PS は資料の作成やレクチャーに際し、内容を復習することで知識の定着やアウトプットできる機会となった。新規 PS は積極的に実技・体験に取り組む様子が見られたが、定例会の限られた時間内では座学の内容を十分に理解できた

とは言えない状態であった。一方で、実技や体験を通して、これまで漠然と捉えていた支援が、利用者の立場や心理を踏まえて個別に考える必要があるものであるという気づきが見られた。例えば、車椅子体験ではわずかな段差や傾斜でも恐怖や不安を感じることから、単に移動を補助するだけでなく、安心感を与える声かけや事前説明の重要性に気づく様子があった。また、視覚障害体験においては、見え方の多様性を実感することで、見えない＝全く見えないという一面的な理解から、一言で視覚障害といっても一人一人の見え方が異なるため、人によって必要な配慮が異なるという認識へと変化していく様子が見られた。このように、体験を通じて支援をただの技術としてだけでなく、相手の立場に立った支援を考えるプロセスとして捉えるという変化が生じていたと考えられる。ただ、実際の支援に繋げることを目的とするのであれば、2回目・3回目の各障害の概要

の部分は事前に資料を共有し、一読した上で研修に出席してもらう必要があると考えた。来年度以降は、各障害に関する基本知識となる部分は事前に学習し、定例会内では補足や質疑応答を行う程度とし、実技に十分な時間を割けるようにするなど、調整することで一定の知識・技術の獲得が可能になると考えた。実技面に関しては、いふこと交流会の際に高校生に指導するなど、他の活動に活かしており、年度はじめの時期に研修を行う意義を感じた。

また、後期から PS となった学生には、初回の定例会で1回目の合理的配慮や PS 活動に関して研修を行い、キャッチアップすることができたが、1～3回までの研修で欠席した新規 PS に対しての補講等を行うことができず、資料の共有のみに止まってしまった。他の活動でガイドヘルプの体験をする際の参加により補うなど、欠席の場合も学習できるような調整が必要だったと考える。

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数 PS	※ () は指導
6/2	定例会	合理的配慮とは PS 活動の概要	18 人	(1 人)
6/16	定例会	車椅子ガイドヘルプ	18 人	(6 人)
6/30	定例会	視覚障害者ガイドヘルプ	19 人	(6 人)
10/6	定例会	PS 活動の概要	1 人	(1 人)

【視覚障害ガイドヘルプ講座】

文責：神谷麻央

1. 目的

視覚障害に関する基本的な知識の習得と、食事の介助や屋外・屋内での移動、階段昇降など、安全な移動支援方法に関する技能習得を目的とする。

2. メンバー

受講生（修了生）：石田、神谷、馴松、我如古、川村、高木、樋口、平井、宮居

3. 活動内容

今回の講座の内容は、講義による知識の習得と、実技演習による技能の習得であった。

座学では、社会モデルやノーマライゼーションなどの考え方や外出保障の重要性を理解しながら、同行援護制度、同行援護従業者の役割と活動の流れ、活動時の留意点などを学んだ。また、場面ごとの支援の方法や注意点、同行援護における活動の意識を学んだ。

演習は、2人1組でペアとなり、アイマスクをつけた視覚障害者役と、ガイドヘルパー役に分かれて演習を行った。

演習内容としては、1日目に伊都キャンパスのスロープやエレベーターを使用して移動した。

2日目は、スーパーでの買い物演習を行った。スーパーに同行援護の形で向かい、お弁当を選んでセルフレジで会計を行なった。この際、支払いは実際の援護同様に、視覚障害者役の学生が現金で支払いを行なった。また、キャナルシティ博多でエスカレーター・階段の演習を行い、ペアでショッピングを行なった。

3日目は、アイマスクを着用してご飯を食べるブラインドランチを体験し、コンビニエンスストアでの買い物演習を行った。

4日目は、地下鉄空港線で博多駅から藤崎駅までの切符の購入、改札、電車の乗降の演習を行った。また、百道浜バスターミナルでバスの乗降の演習をおこな

った。その後、代筆・代読に関する意義と留意点、流れを確認して演習を行った。

4. 活動の振り返り

今回の活動では、同行援護において必要な基本的な知識と技能を学ぶことができた。視覚障害者に対する外出保障や情報提供の重要性や、同行援護の制度について学ぶことを通して、障害の社会モデルやノーマライゼーションについても学ぶことができた。

特に、情報保障については、演習の中でも重要な要素であった。視覚で得られる情報を、主観で取捨選択して伝えるのではなく、できるだけたくさん提供し続ける姿勢の重要性を、実際にガイドされたときの困難さから、より実感できた。

今回、同行援護の心構えとして、「①安全②能率③見た目に自然④やりやすい」の4つが重要であることを学んだ。これは、方法やルートなどを効率的なものにし、安全性を担保することを前提とし、見た目に自然で、マニュアルに囚われず、柔軟なやり方で本人とコミュニケーションを取る、ということである。これらの4つの視点から実際の演習を行なったことで、参加者全員が、それぞれが講義で学んだ基本的な知識や技術を活かしながら、それぞれが安全でやりやすい形で、柔軟に演習を行うことができていた。

演習のなかで、実際に情報が視覚で受け取れない困難さと不安感を感じると同時に、どのような情報を必要としているか、逆にどのような部分から情報を入手しているかなどを体感できた。そこから学んだことをガイドする側になって実践することができて、学びが深まったと思う。

今回の研修で学んだことを活かす実践的な機会に参加し、より学びを深めたいと感じた

表1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
2/17	九州大学伊都キャンパスセンター 2号館 2103 教室	同行援護制度の理解、同行援護従業者の役割と活動倫理	9人
2/18	麻生介護サービス 本社研究室	各場面の同行援護の方法、 買い物、階段・エスカレーター演習	9人
2/20	九大伊都キャンパス 2103 教室	各場面の同行援護の方法、ブラインドラン チの体験、買い物・移動演習	9人
2/24	麻生介護サービス 本社研究室	地下鉄、バスの乗降演習、 代読・代筆の講義と演習	9人

【手話講座】

文責：南里 凧咲

1. 目的

障害者権利条約第2条において「『言語』とは、音声言語及び手話その他の形態の非音声言語をいう。」と規定され、加えて障害者基本法第3条では「言語（手話を含む。）」と示されている。手話が言語の1つであることを背景に、手話の社会的認知が進むと同時に、手話でコミュニケーションができる人材や手話通訳ができる人材がますます求められている。その中で、聴覚障害のある学生や保護者、教職員等との手話によるコミュニケーションや、授業や式典などの行事等における手話通訳が必要な場面で活動を行っており、手話技術の獲得のために手話講座を受講した。

後述する各コースのそれぞれ目的として、初級コースにおいては手話を初めて学ぶ学生が日常のコミュニケーションができるようになること、中級コースにおいては日常のコミュニケーションができるレベルの学生がスムーズにコミュニケーションができるようになることであった。

2. メンバー

・初級コース（7名）

本岡、江島、川村、河本、松尾（果）、宮居、村川

・中級コース（3名）

深堀、馴松、南里

3. 活動内容

初級コースでは、手話検定3級の合格を目標に受講した。一般社団法人 Sonrie の講師のご指導のもと、基本的な語彙や文法、日常生活でよく用いられる表現を中心に学習を進めた。講座では、先生から新しい単語や表現を教わり、その後に学生が表現を繰り返し表現するという方法で手話表現を学習した。反復練習を通して、手の形や動き、表情の重要性を意

識しながら、正確に伝える力の習得を目指した。

中級コースでは、これまでに手話講座を受講した学生が手話検定2級の合格を目標に受講した。初級コースと同様の講師のご指導のもと、より実践的な内容に取り組んだ。先生に単語を一方的に教わるだけでなく、自ら積極的に手話表現を使いこなせるよう、会話の練習も行った。また、聴覚障害者の暮らしや言葉の使い方について学び、より自然な表現を身につけるとともに、ろう社会への理解を深めた。

4. 活動の振り返り

筆者は中級コースを受講していたため、中級コースを中心に活動の振り返りを行った。中級コースでは、語彙や表現を学ぶだけではなく、それを文章の中で使い、ろう者に自分の意見が正確に伝わるよう工夫して話すことが求められた。その過程で、自然な表現やスムーズなやり取りを意識する力を養った。さらに、日本語対応手話ではなく、ろう者の母語である日本手話としての語彙や表現も学んだことで、単なる言語習得にとどまらず、ろう社会への理解を深める機会となった。

一方で、課題も感じた。講座の初期段階では、初級コースと同じ受動的な姿勢で講座を受講してしまい、会話練習において積極的に発言することや、間違いを恐れずに話そうとする姿勢が十分ではなかった。講座の動画を見返したことでその点に気づき、以降は表現を繰り返すだけでなく、質問に対してより多くの語彙を試すように意識した。

また、今年度は講座内での手話検定対策があまり行われなかったため、各自で試験対策に取り組んだ。2級のスピーチは2分間と、3級よりも長くなっていたため、語彙力の強化や話題を広げる工夫を意識した。自主的な対策を重ねる中

で、ろう者との実際のコミュニケーション場面を想像できるようになった。

この活動を通して、自ら課題に気づき、主体的に改善しようとする姿勢が身についたと感じている。また、手話を言語や文化として捉える視点を持つことができたことは大きな意義があったと感じる。この視点の変化は、多様な背景を持つ人々が共に生きる共生社会に向けた重

要なものであると考える。今後は、講座内での学習にとどまらず、ろう者の方と実際に関わる機会を積極的に持ち、学んだ表現を実践の場で活用していきたい。さらに、授業や式典などの行事における情報保障など手話が必要な場面において、手話通訳を通じた社会包摂の実現に貢献していきたい。

表 1) 初級コース活動スケジュール

日程	活動内容	参加人数
6/3	自己紹介、名前	6人
6/10	色、数字	7人
6/17	家族	7人
6/24	自己紹介	7人
7/1	略歴	7人
7/8	曜日	6人
7/15	タイムテーブル	7人
7/29	通勤、通学	7人
8/19	猛暑対策	7人
8/26	今までの復習	4人
9/2	嗜好品	4人
9/9	食習慣	6人
9/16	スポーツ	6人
9/30	総復習	6人

表 2) 中級コース活動スケジュール

日程	活動内容	参加人数
6/4	自己紹介、初級の復習	2人
6/11	食習慣	3人
6/18	嗜好品	2人
6/25	趣味（スポーツ）	3人
7/2	趣味（スポーツ、インターネット）	3人
7/9	旅行（九州～日本）	3人
7/16	旅行（外国）	3人
7/30	会話練習	2人
8/6	天気、災害、ハプニング、猛暑対策	3人
8/20	病気、怪我	3人
8/27	自動車、家	3人
9/3	社会	3人
9/10	社会	3人
9/24	まとめ	2人

両コースすべてオンラインで実施された

【パソコンノートテイク講座】

文責：荒瀬泰珂

1. 目的

パソコンノートテイク（以下、PCNT）は音声情報を視覚情報にリアルタイムで変換することで、情報へのアクセスを保障することを目的とする。PCNT は学内の授業やゼミに加え、シンポジウムや式典等で実施されている。障害のある学生のニーズに合わせるために関係入力や要約入力などの技術が必要である。本講座は必要な技術を備えたノートテイク者を養成するために実施された。

2. メンバー

夏季

指導 PS：濱、重信、鈴木、武内、林、秋武、隈本、白水、野中、濱崎、福長、上田、大森、小野、吉村

受講 PS：江島、大野、荒瀬、井上、梅崎、川村、河本、平井、福元、舟越、船越、松尾（果）、村川、他大学から7名（九州工業大学1名、長崎大学2名、長崎大学障害学生支援コーディネーター2名、福岡教育大学1名、鹿児島大学1名）

春季

指導 PS：重信、清田、鈴木、白水、野中、上田、大野、大森、吉村、川村、河本、福元、舟越、村川

受講 PS：神谷、馴松、高木、宮居、他大学から7名（長崎大学1名、大分大学4名、宮崎大学2名）

3. 活動内容

第1回講座では、はじめに障害学生支援および聴覚障害の基礎知識について学び、PCNT 班として活動する際の留意点、表記方法について共有した。指導 PS が実際に PCNT する様子を利用者視点で体験し、理解しやすい PCNT を考えた。口頭で話された内容をリアルタイムで文字起こしする仕組みである captiOnline（キャプションライン）の概要について

説明を受け、実際に体験したのち、指導 PS とペアになり関係入力を行った。

第2回では整文入力を取り扱った。説明を受けた後、整文にする練習をした。その後は、複数話者における整文関係入力を実施した。そのあと、スクリーンショットの活用場面や方法を学んだ。

第3回ではまず、要約技術について学んだ。要約練習を各自で実施後、動画の整文関係入力を練習した。その後は音声情報を自動で文字起こしするアプリである UD トークの使用場面と方法を学び、実際に修正に入った。

第4回では、まず英文入力と前ロールについてそれぞれ説明を受け、実習をした。その後、守秘義務といったノートテイク者としての心得を学んだ。最後の実習として模擬講義における整文関係入力を行なった。毎回最後にその日の振り返りを行い、疑問点の解消をしたり指導 PS から助言を受けたりした。

4. 活動の振り返り

第1回講座では、関係入力の際にペアとうまく関係がとれず、とても人前でできるようなものではなかったが、回を重ねるごとに、少しずつではあるが、表出できない情報の量が減った。要約入力は話を聞きながら必要な情報が抜け落ちないようにしなければならぬので、傾聴とタイピングを同時に行う難しさを感じた。ノートテイク者として実際に支援に入る際には、守秘義務があり、学生の個人情報だけでなく、授業の資料も漏洩させてはならず、終わり次第処分しないといけない。これは障害学生と信頼関係を築くうえで、重要であり、自分が支援に入る際に気をつけなければならない。

また、PCNT が急遽必要になることもあるため、日頃から対応できるように準備をしておくことが必要であり、その例として、タイピング練習を定期的に行うことや captiOnline の自分なりの使いや

すい配置を決めておくことなどがあげられる。また、複数のアプリを開いてすることも多いので、自分が見やすいような配置を考えることも必要である。

表1) 活動スケジュール

日程※1	活動場所	活動内容	参加人数※1、2
8/27 2/25	オンライン	オリエンテーション 聴覚障害学生支援の概要 PCNT 利用者体験 captiOnline の概要と操作体験 連係入力の講義と実習 振り返り	13人(9人) 4人(10人)
9/3 2/27		アイスブレイク 整文入力の講義と練習 整文連係入力(複数話者) スクリーンショットの利用 整文連係入力(動画) 振り返り	13人(9人) 4人(10人)
9/10 3/2		アイスブレイク 文章要約の講義と実習 要約1人入力 連係入力(動画) UDトークの講義と実習 振り返り	12人(10人) 4人(10人)
9/17 3/6		アイスブレイク 英文入力の講義と実習 前ロールの基本操作の説明と実習 ノートテイカーとしての心得 整文連係入力(模擬講義) 振り返り	13人(9人) 4人(10人)

※1. 日程と参加人数は上段が夏季、下段が春季

※2. 参加人数は 九大 PS の受講者(指導 PS)

【令和7年度 大学間連携プログラム（長崎大）】

文責：宮居里風

1. 目的

九州・沖縄地区国立大学所属の学生及び教職員を対象とした講演とグループワークを通して、障害学生支援に関する知識を獲得し理解を深めること、また、支援方法やそれに伴う課題点などの情報交換を行い、支援の質の向上を図ることを目的とした。

2. メンバー

参加者：古瀬、荒瀬、河本、我如古、宮居、村川

3. 活動内容

今年度の大学間連携プログラムは、「研修会」と、「学生交流会」で構成された。研修会では、北アリゾナ大学アクセス&インクルージョン部門ディレクターのジェイミー・アクセルロッド氏と、米国 AHEAD 執行弁護士のポール・グロスマン氏による、「米国の 50 年の経験を踏まえ、日本の高等教育における障害学生支援をどのように発展させるか」と題した講演が開催された。講演で障害学生支援の歴史的背景や制度的枠組み、実践現場について理解を深めた。学生交流会では、PS が主体となり、司会や班ごとの意見交流のファシリテーターを務め、また、事前に交流会の全体構成や当日使用するスライドの作成をした。

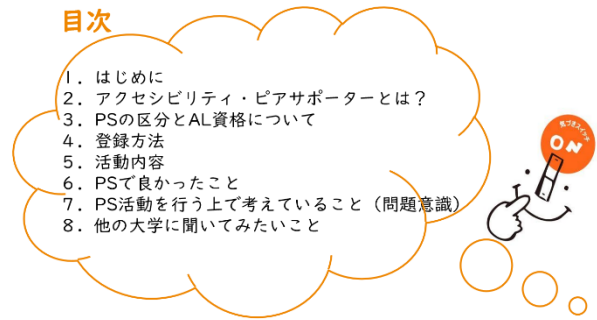


（図1）講演後の質疑応答の様子

講演会の後の学生交流会では、3、4人で1グループとなり、各大学の支援方法や講演を受けて感じた大学ごとの課題点、学生ができる支援方法についての意見交換を行った。最後に各大学で自身の大学での活動紹介と質疑応答の時間があり、学生交流会が終了した。

目次

1. はじめに
2. アクセシビリティ・ピアサポーターとは？
3. PSの区分とAL資格について
4. 登録方法
5. 活動内容
6. PSで良かったこと
7. PS活動を行う上で考えていること（問題意識）
8. 他の大学に聞いてみたいこと



（図2）PS 活動紹介に使用したスライド

4. 活動の振り返り

講演を通して、障害者支援における建設的対話の重要性について改めて認識させられた。また、米国では、障害のある当事者が主体となり、差別の撤廃や権利の獲得のために行動を起こし、制度の改善につなげた歴史がある。小さな行動でも、それが積み重なることで歴史を大きく変える可能性があるということを学び、障害学生支援を行う PS として支援をとおして感じた課題点などをうやむやにせず、改善するために働きかける意識が芽生えた。

交流会での他大学との情報交換では、PS にしかない活動、他大学にしかない活動双方を知ることができ、とても興味深かった。PS は他大学と比較して、厳密な制度の下、組織として活動を行っているということを再認識した。また、他大学の取り組みとして特に興味深かった内容は、佐賀大学の無償ボランティアの制度である。PS は有償であるがゆえに責任が重く、活動に敷居の高さを感じることも

ある。仲間である学生が支援する意義を考えると、無償ボランティア制度も魅力的に感じた。

当事者による小さな行動や声の積み重ねが、制度の改善や社会の変化につながるという意識を持ち、現状に疑問や課題を感じた際にはそれをそのままにせず、

対話を通して周囲に伝え、改善に向けて積極的に行動することが重要であると感じた。今後は日々の支援の中で得た気づきを共有し、他大学の取り組みも参考にしながら、より良い支援体制づくりに主体的に関わっていきたい。

表 1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
7/28	PS ルーム	事前打ち合わせ	6人
9/25	各自作成	スライド作成開始	6人
10/17	PS ルーム	事前打ち合わせ	4人
10/25	長崎大学	講演・交流会	6人
11/7	PS ルーム	事後振り返り	5人

【大学間交流会—大分大学—】

文責：黄新皓

1. 目的

大分大学より、物理的バリア対策の取り組みをはじめ、PS 全体の活動について知りたいとの要望を受けたことをきっかけに、交流会が行われた。この交流会では、PS によるプレゼンテーション、および実際に学内の建物・施設を見学するとともに、大分大学の教員と学生との交流・情報交換を行うことを目的とした。

2. メンバー

PS：黄、武内、川村

大分大学：教員 1 名、学生 6 名

3. 活動内容

* 事前に資料等を作成

大分大学は、九州大学の PS の取り組みのうち、物理的バリア対策や仕組み等を知りたいという希望があったため、PS 全体の概要に加えて、BM（バリアフリーマップ）、設備改善プラットフォームに関して、各班の昨年の資料に基づき、活動内容について紹介用スライドを作成した。

* 交流会



大分大学・九州大学交流会 ～九州大学の取り組み～

九州大学アクセシビリティ・ピアサポーター

経済学部経済・経営学科1年 川村 菜穂
理学部数学科4年 武内 悠
地球社会統合科学府博士3年 黄 新皓

(図 1) 交流会で使用したスライド

九州大学からは PS 全体の概要（説明担当：川村）、BM（説明担当：武内）、設備改善プラットフォーム（説明担当：黄）について紹介した。紹介内容に対し、大分大学からの質問にも回答した。

その後、IN 室横のバリアフリースイレ、車椅子体験でセンター 1 号館・2 号館の通路・エレベーター動線等の見学を行った。

最後に、PS ルームに戻って、気楽に交流をしつつ、大分大学が今後始めたいと考えている支援内容について伺うとともに、BM 作成に着手するための助言も行った。



(図 2) センター 1 号館での車椅子体験

4. 活動の振り返り

約 1 時間の交流会の中でメンバーたちは、PS の全体概要、BM の作成マニュアルおよびその成果物の紹介、さらに意見収集の基盤の設備改善プラットフォームの仕組みについて、簡潔に紹介を行った。

大分大学の学生は、引率教員の授業履修生であり、大分大学においても PS のような支援体制の構築を検討したいとのことであった。着手点として、物理的バリア対策から、BM のようなものの作成を予定しているようだ。加えて、設備改善プラットフォームに強い関心を示しており、ゼロから改善要望を収集していくための有効な第一歩となり得るものであると説明した。

一方で、改善すべき点としては PS が事前に先方の特に知りたい内容、さらには現在の構想の到達点を十分に把握できていなかった点が挙げられる。これらの情報をあらかじめ共有・把握していれば、よりニーズに合う資料の作成が可能となり、交流の場においても、より活発で双方向的なやり取りを展開できるかもしれない。

九州圏の大学同士として、今後さらに交流関係を発展させていくことが期待される。とりわけ、九州大学は、規模が大きく、九州圏における代表的な国立大学

として、リーダーシップを取り他大学と協力することは、地域貢献の重要な一環ともなり得ると考える。

表 1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
9/26	1304 教室	事前打ち合わせ	3 人
9/26	PS ルーム・学内見学	交流会	12 人
9/26	PS ルーム	事後振り返り	4 人

【第 21 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム】

文責：川村菜絵

1. 目的

本活動は、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）が主催する、日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムへの参加を通して、本学が行っている聴覚障害者支援を発表するとともに、他大学や企業との交流から、新たな学びや発見を得て、互いにスキルや支援体制を向上させることを目的とした。また本発表は、九州大学の情報保障体制および PS の活動について共有することで、大学における情報保障体制の整備に資することを目的とした。

2. メンバー

武内、秋武、川村

3. 活動内容

主に以下の 3 つの活動を行った。

1 つ目は PS 活動の紹介だ。このシンポジウムは聴覚障害者支援に重きを置いた活動であったため、PS 活動の中でも、パソコンノートテイク（以下 PCNT）養成講座、式典情報保障、キャンパススイッチの 3 つを紹介した。当日はポスターを展示したうえで、1 人が口頭で発表し、もう 1 人が手話通訳しながら発表した。（図 1）そのため、当日を迎えるまでポスター作成や手話の練習に勤しんだ。また、情報保障の一つとして、UD トークも活用した。発表後、シンポジウム参加者より「式典の手話通訳を学生がしているのはすごいね」「キャンパススイッチをもっと学外に周知すべきだ」等、これからの PS 活動に還元できる様々な意見が寄せられた。

2 つ目は、式典情報保障のメイキングビデオに手話動画と字幕を挿入したことだ。シンポジウムへの参加が決まったのち、式典情報保障メイキングビデオを流すことが決定し、ビデオ自体の情報保障として、手話動画と字幕をつけることになった。実際に手話を行い、撮影し、編

集まで手掛けた。

3 つ目は、他大学の学生との交流だ。シンポジウムの後、学生交流企画に参加し、グループに別れつつ様々な大学の学生と交流した。グループの中には 1、2 人程耳がきこえない・きこえにくい人が参加しており、手話や筆談を利用して交流をした。レクリエーションでは、自己紹介、絵の伝言ゲーム、劇の 3 つを行った。劇では、「聴覚障害者または支援者のあるある」というテーマで各グループ、劇を構想し発表した。



（図 1）当日のポスター発表の様子

4. 活動の振り返り

今回、シンポジウムに参加したことで、他大学で行っている活動を知ることができた。加えて、手話でコミュニケーションを取ることを実感した。実際に聴覚障害者の方に向けて手話で発表をしたとき、緊張して手が震えたが、発表を終えた後に手話で質問の受け答えができて、話がきちんと伝わっていたことへの嬉しさと、相手の手話を理解し答

えることができたことへの達成感を感じた。他大学の方との交流でも、手話と表情を使ってコミュニケーションを楽しむことができた。

また、例えば、VUEVO というグループ討論型の授業に対応した機械や、UDトークの代わりに Google pixel を使用すること、週に 1 回 PCNT や手話の研修を行うこと等、他大学の活動の中でも PS も取り入れたらよりよい活動ができるのではないかなと思うものも多くあり、貴重な機会であった。他大学の活動を知る中で、PS 活動の専門性の偏りや手話を学ぶ機会の少なさという課題も見えてきた。これらの感じたことや他大学の活動、そこから見えてきた課題を定例会で PS に共有し、課題の共通認識を PS 全員が持てたと思う。

シンポジウムのお話の中で、「多様性を認めないのも多様性である」というお話があり、ハッとした。現代社会では多様性が重要視されており、多様性を認めない人は柔軟性が足りていないのだという思いが一気に覆された、新しい視点だった。本来の目指している「多様性」とは

認める人も認めない人も包摂しているのだという気づきを得ることができ、大変勉強になった。

来年度は、PS 活動の紹介だけでなく、PS 活動の課題を取り扱い、その解決に向けた活動を広報することでより良い発表につながると思う。



(図 2) 発表ポスター

表 1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
8/6	PS ルーム	発表内容の検討	3人
8/27	PS ルーム	打ち合わせ	3人
9/2	PS ルーム	ポスター作成	3人
9/9	PS ルーム	手話動画の撮影	3人
9/10	オンライン	動画編集	1人
9/14	オンライン	ポスター作成	1人
9/16	PS ルーム	ポスター作成	2人
9/19	オンライン	原稿作成	1人
9/22	PS ルーム	手話練習	2人
9/25	PS ルーム	準備物の用意	2人
9/26	PS ルーム	前日準備	2人
9/27	国立オリンピック記念 青少年総合センター	本番発表・他大学生との交流	2人

【学生モニター会議】

文責：武末愛理

1. 目的

本学の教育、学生生活支援、就職支援等に関する取組に関して、学生の立場から建設的な意見、提案等を提示する。

2. メンバー

鈴木、武内、武末、福元

3. 活動内容

- ・「①IN 室ホームページ改修提案」
- 「②CUD マップ新配色案の検討状況」
- 「③学校祭のアクセシビリティ向上」(図1 参照)

1 点目に関して、支援の広報のため、2022 年度に PS が作成した IN 室ホームページ改修案を練り直し、再度提案した。2 点目に関して、昨年度 PS が作成した、色覚多様性を踏まえた配色のマップの設置状況についてうかがった。3 点目に関して、学校祭では学内外から多くの方が集まる一方、アクセシビリティを担保する機関がない現状から、PS、実行委員会などが一体となりアクセシビリティ向上を図るシステムや、具体的な施策を提案した。会議後も、九大祭実行委員会にも所属する PS を中心に、パンフレット、マップの改善やアクセシビリティ総合拠点の設置について検討を重ねており、さらなる活動の発展が望まれる。

③学校祭(九大祭、芸工祭)のアクセシビリティ向上

- ・オープンキャンパスでは、IN 室は入学後の合理的配慮などについて相談部屋を設け、PS は移動支援のための特設などを行う。
- ・一方、より幅広い属性の方が多く来場する学校祭では、どちらも表立った取り組みをしていない。
- ・PS や IN 室、実行委員会、学生支援課などが一体となり、アクセシビリティ向上を図れる部分があるのではないか。

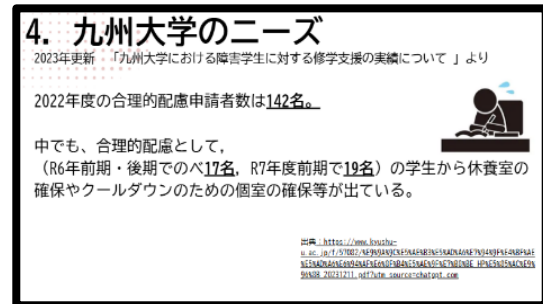
概要

1. 人的、物的対応を行う総合拠点の設置
2. パンフレット、マップのバリアフリー化
3. 既存マニュアルの変更、キャンパス間での共有
4. アクセシビリティに関する取り組みの広報

(図1)「学校祭(九大祭、芸工祭)のアクセシビリティ向上」要点

- ・「誰もが安心して学べるインクルーシブキャンパスへーカームダウン室の導入提案ー」(図2 参照)

昨年度まで PS として活動していたソロ空間マップの取り組みを引き継ぎ、学生が安心して学ぶためのカームダウン室の導入を提案した。他大学や他教育機関においても導入されている場合があり、そのような先行事例を参考に九大インクルーシブキャンパスに向けたカームダウン室の構想を発表した。

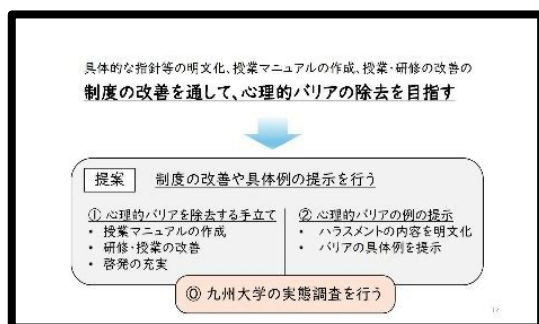


(図2) カームダウン室のニーズ

- ・「セクシュアルマイノリティにとって過ごしやすい大学にー心理的バリアの除去の提案ー」(次ページ図3 参照)

令和6年度に問題提起したセクシュアリティに関する提案を本年度も行った。提案内容は、九州大学の実態調査を行うことと、心理的バリアを除去する取り組みを講じること、心理的バリアの例を具体的に提示することである。

本学には、基本方針はあるものの、それを行う手立てが具体的に明記されていない点に焦点を当て、上の取組を提案した。会議を通して、今後の取り組みが決められた。まずは、九州大学内のセクシュアリティに関する実態調査を学生支援課が主導となり行うこと。次に、教職員向けの授業マニュアルの作成や、学生・教職員向けの研修・授業の充実を行うこと。今後は、PS も協力し、大学内のセクシュアルマイノリティが安心して過ごせるようになってほしいと願う。

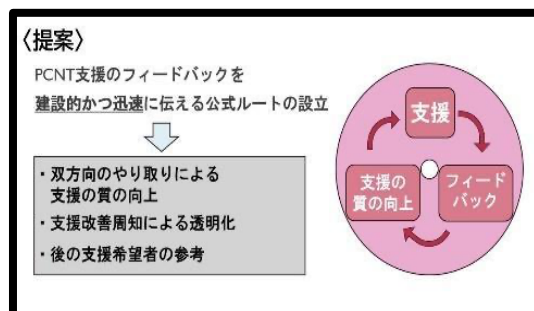


(図 3)「セクシュアルマイノリティにとって過ごしやすい大学に」要点

・「合理的配慮を身近なものに
～PCNT（パソコンノートテイク）振り返りに関する提案～」(図 4 参照)

PCNT 支援の振り返りに関して、支援を利用する学生の意見や改善要望を確実に受け取るルートを確保するため、Google フォームや Microsoft Forms を活用したフィードバック（以下、FB）の導入を提案した。現在の FB は、支援後に PS 間で行われる話し合いや振り返りシートの記入に限られており、利用学生との直接的な交流は年に 1～2 回程度にとどまっている。そのため、利用学生の声を双方向でやり取りする機会が少なく、支援の改善が遅れる要因となり得る。また、利用学生の改善希望が支援体制の内部に十分に届いていない可能性があり、システムの透明性にも課題があると考えられる。こうした背景から、PCNT 支援における FB を建設的かつ迅速

速に伝えるための、公式なルートの設立を提案した。



(図 4)「合理的配慮を身近なものに」要点

4. 活動の振り返り

モニター会議では、ハード面、ソフト面双方から学内のアクセシビリティ向上のために話し合いを行った。提案後には質疑応答もあり、学生と学務課の意見交換を経て内容をより深めることができた。会議後には、今回の提案の実装に向けて、各個人が班へと引き継ぎを行った。学校祭、ソロ空間に関する取り組みは、次年度以降新規の班を立てて活動する予定である。セクシュアリティに関する提案について、全学調査が必要との理事の返答を受け、わたし色と班において質問紙を構成中である。PCNT の FB 導入に関しては、PCNT 班において検討中である。今後は各提案の意見のすり合わせをしながら、内容や活動班をくつつけたり組み合わせたりして実現を目指したい。

表 1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
11/21	伊都	学生モニター会議	4 人

【総会】

文責：荒瀬泰珂

1. 目的

年度初めや学期末に PS が集まり、活動を振り返ること等により、学生が支援に入る意義や PS としてのあり方を考え、共有する。

2. メンバー

第1回総会：黄、延原、瀨、重信、上村、清田、鈴木、中島、林、三浦、森、山田、秋武、内村、江島、北村、黒田、佐藤、白水、檜木、野中、濱崎、深堀、福長、松尾（和）、森下、山口、石田、伊牟田、岩元、上田、江口、大野、大森、小野、神谷、瀧内、友岡、永野、駒松、南里、日永田、荒瀬、井上、梅崎、我如古、川口、川村、河本、高木、平井、平川、福元、舟越、船越、松尾（果）、宮居、村川

第2回総会：黄、延原、上村、清田、鈴木、武内、武末、中島、林、藤原、古瀬、本岡、森、山田、秋武、内村、江島、北村、黒田、佐藤、白水、檜木、野中、濱崎、深堀、福長、山口、石田、伊牟田、岩元、上田、江口、大野、大森、小野、神谷、瀧内、友岡、永野、駒松、南里、日永田、吉村、荒瀬、井上、梅崎、我如古、川口、川村、河本、高木、平井、福元、舟越、松尾（果）、宮居

第3回総会：延原、重信、上村、清田、鈴木、武内、武末、中島、林、藤原、古瀬、三浦、本岡、森、隈本、佐藤、白水、檜木、野中、濱崎、深堀、福長、松尾（和）、森下、山口、石田、伊牟田、上田、江口、大野、大森、神谷、瀧内、友岡、駒松、吉村、荒瀬、井上、梅崎、我如古、川口、川村、高木、樋口、平井、福元、舟越、船越、松尾（果）、宮居、村川

3. 活動内容

主に成果物紹介、班活動が行われた。

第1回では、活動班紹介をした後、「PS における『障害者支援』とは？」というテーマで PS について考えた。第2回では、情報保障メイキングの鑑賞をし、班で前期の活動の振り返りと、PS 活動をするうえでの問題についての議論を行なった。第3回では、まず成果物発表を聞いた。その後はグループに分かれ、1年間の活動を振り返り、一言総括をし、班で成長樹を作成した。最後に PS 修了式を実施した。

4. 活動の振り返り

第1回総会の時点で、新規 PS は知識も経験もなく意見を出すことができていなかったが、1年間の活動を通して新規だけでなく、多くの PS が成長をしたことが、第3回の成長樹作成で感じられた。すべての回で成長樹作成を含む PS 活動に関するグループワークが実施されたが、学年や所属に関係なく意見を言い合うことができるゆえ、経験豊富な PS の発言に影響を受けたことも先述の結果を生んだと考えられる。

第2回では PS における様々な問題について班ごとに議論していたが、新規 PS は第1回よりも、意見を言えるようになった。

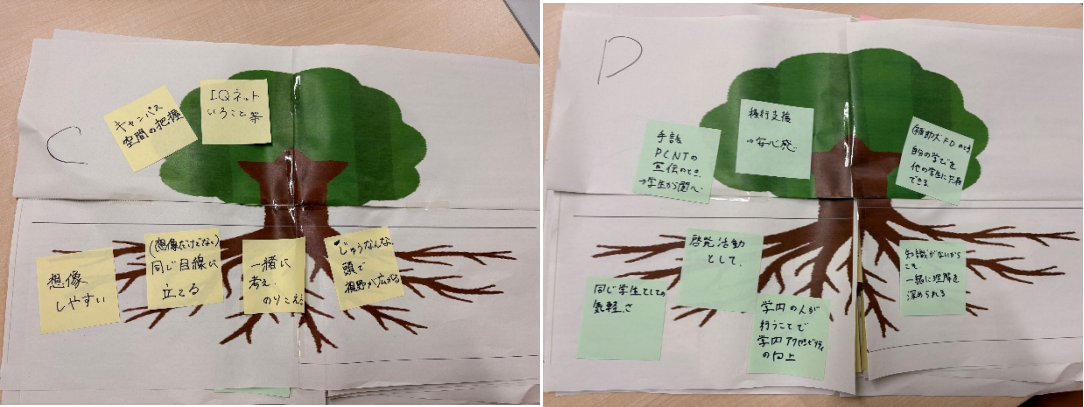
第3回では先述した成長樹作成に加え、活動の学び・気づきを3つの単語で表す一言総括を行った。活動を単語でまとめるのは難しく、苦戦したが、1年間の活動を振り返るよい機会だった。

課題としては、授業等の関係で参加できない PS が意見共有できないことである。第3回では事前に欠席者から意見を共有してもらっていたが、逆ができていたかは定かではない。確実に欠席者にも共有できるような仕組みが必要だろう。

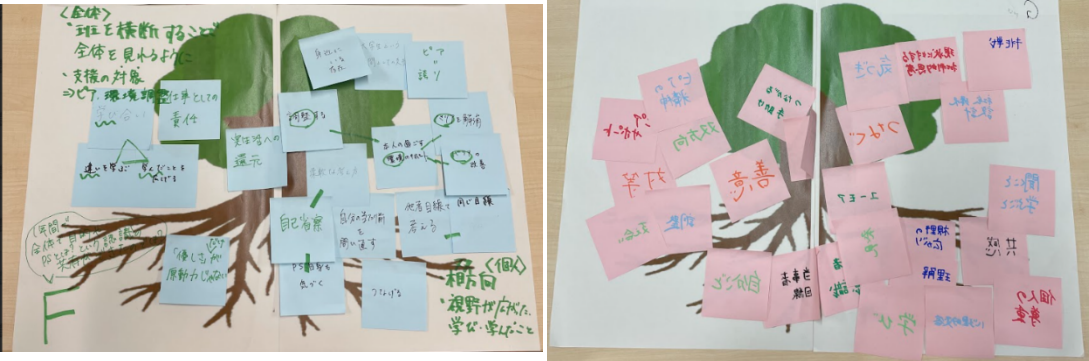
成長樹で共有した「PS における『障害者支援』」をもとに今後の活動に従事したい。

総会は全 PS が意見交換をし、成長す

る場である。今後も PS が成長する場また、成長を実感する場としての役割を果たしていくと考えられる。



(図 1) 第 1 回で作成した成長樹



(図 2) 第 3 回で作成した成長樹

表 1) 活動スケジュール

日程	活動場所	活動内容	参加人数
5/26	伊都キャンパス	第 1 回総会	58 人
8/6	原則対面	第 2 回総会	56 人
2/16		第 3 回総会	51 人

【運営会議】

文責：鈴木万結

1. 目的

主に EPS が、IN 室の先生方とともに PS 全体の運営について議論・検討することを目的としている。今年度から、活動班リーダーによる活動報告は必須でなくなり、より効率的に運営体制の見直しを図る体制が整備された。

2. メンバー

メンバー：重信、鈴木、武内、武末、古瀬、秋武、白水

5 月会議参加者：黄、延原、上村、清田、中島、三浦、本岡、森、北村、黒田、佐藤、檜木、野中、濱崎、福長、松尾（和）、森下、山口、石田、岩元、江口、大野、小野、瀧内、友岡、永野、馴松、南里、日永田

オブザーバー：山田、江島、荒瀬、井上、河本、平井、村川

3. 活動内容

5、9 月の運営会議では、年度内に活動する班の取捨選択や定例会での扱いに関して、IN 室の先生方と協議を行った。

5～6 月に、毎月の作業従事簿などの提出率の向上について話し合った。8 月にはより利便性が高く、提出を忘れにくいシステムが整えられた。

6～11 月には、PCNT または手話講座の受講後も、継続的に技術を高めるための取り組みとその運営形態について話し合った。会議後、「手話部」は PS の範囲外で活動しており、また PCNT 班は年度内に練習会を 2 回行っている。

9～10 月に、PS 活動の謝金の支給基準の整理や、それに伴う公平性の確保を目指して話し合った。年度や班によって対応が変わるため、逐次の相談と明文化、全体での情報共有が必要であることを確認した。

7～8 月、12～2 月は第 2 回、第 3 回総会内容を検討した。参加する PS 全員

が目的意識を持ち、主体性を持って学びや気づきを得られるようなプログラムを模索した。

10～3 月は、運営体制の引き継ぎについて取り組んだ。業務とマインドセットの両面での引き継ぎ方法を考えた。

4. 活動の振り返り

今年度前期は、新規 PS が授業の一環として PS 活動に参加する体制が導入された。授業の履修に関する事項は新規 PS のみに周知されており、他の PS は詳細が不明なまま、新規 PS への対応を行った。このような情報共有の不足については、IN 室の先生方と PS、双方の様子を把握している EPS が運営会議で議題に上げることが重要であると感じる。

今年度の運営会議では、活動班リーダーの出席を必須としなくなったことで、活動報告の時間を別の検討に割くことが可能になった。その一方、活動実態の把握をしにくくなった面もあると考える。活動班のリーダーが、IN 室の先生方や周りのリーダーとの情報共有を定期的に行うことも、円滑な運営において重要である。運営会議の場においてそれが必要であるか、また別の機会を設けるかは検討が必要だろう。

また、今年度は既存の活動班以外にも、1 人の PS の発想から PS 全体の活動として発展した例がいくつかあった。このように新規の活動を行う場合、スピードを重視し IN 室の先生方の確認を経て実行に移すか、運営会議でも取り扱うべきかについても、検討の余地がある。

APS よりも EPS は高次のマネジメントが求められており、運営会議は EPS が活動する場として大変貴重である。このことを意識しつつ、よりよい PS の運営のため、運営会議の体制も常に見直す必要がある。

表1) 活動スケジュール

日程	活動内容	参加人数
5/12	活動班の決定、書類提出形式の検討	35人
6/16	書類提出検討、AL 試験受験方針、PCNT 技術維持活動の検討	6人
7/14	第2回総会内容、新規PSの授業システムの共有	5人
8/18	書類提出検討、第2回総会振り返り	6人
9/8	後期ミニレクチャー内容、後期活動計画、謝金ルールの検討	8人
10/20	運営人材育成、支援技術維持活動、謝金ルールの検討	6人
11/17	次年度EPS募集の検討、支援技術維持活動、 後期ミニレクチャー内容の共有	6人
12/22	第3回総会内容、新活動班設立手順、次年度EPS募集の検討	6人
1/19	第3回総会内容、次年度引き継ぎ方法の検討	7人
2/9	第3回総会内容、次年度PS活動開始時期、 新規PSの授業システム周知の検討	4人
3/9	新歓活動内容の共有、第3回総会振り返り、謝金ルールの検討 次年度活動、総会運営の検討	9人

すべてオンラインで実施

【定例会】

文責：荒瀬泰珂

1. 目的

毎週月曜の18:30～20:00に伊都、馬出、大橋、それぞれのキャンパスごとに一か所に集まり、合同でミニレクチャーや班活動を実施する。

2. メンバー

回ごとに参加メンバーが変わるため、記載しない。

3. 活動内容

流れは下記のとおりである。

18:30～18:50 ミニレクチャー

18:50～19:45 各班活動

19:45～20:00 活動報告・連絡

ミニレクチャーでは、EPSを中心にPSの活動や障害に関わることについてディスカッションした。各班活動は伊都、馬出、大橋それぞれで活動をした。活動スケジュールは表1のとおりである。

定例会後は各班がその日の活動報告、外部研修の案内等の連絡を行った。

4. 活動の振り返り

PS1年目のSPSは、研修でPSとしての基礎知識を得られたので、PSとして活動する礎になった。各活動班で活動する際は、先輩の助けを借りながら少しでも貢献できるように活動をした。

ミニレクチャーではPSに関することをはじめ、さまざまなことについて考える機会が多かった。正解のない曖昧なテーマに関しては、先輩や同期の考えを聞き、そこから意見を言った。

以上の活動を通して、定例会をする意義として、ミニレクチャーなどを通して学生が支援をする意味を考える時間を作ることが考えられる。このことを肝に銘じて、PSは今後の活動に、既存についても新規についても、従事する必要がある。

表1) 定例会におけるミニレクチャーの内容

日程	内容	参加人数
6/2	守秘義務について①	53人
6/9	守秘義務について②	53人
6/16	合理的配慮について	49人
6/23	他大学で行われているPSによる支援活動	51人
6/30	セクシュアリティとは	49人
7/7	セクシュアリティの違いによるバリア①	57人
7/14	セクシュアリティの違いによるバリア②	53人
10/6	PEPNet-Japan シンポジウム 活動報告	49人
10/20	「社会的障壁」について	50人
10/27	九州大学における合理的配慮の流れ	54人
11/10	大学間連携プログラム研修会 活動報告	53人
12/1	PSの区分/PS活動と将来のつながり①	48人
12/8	PS活動と将来のつながり② 先輩PSによる体験談	51人
12/15	読書バリアフリーについて①	57人
12/22	読書バリアフリーについて②	51人
1/19	セクシュアリティに関する心理的バリアを減らそう①	58人
1/26	セクシュアリティに関する心理的バリアを減らそう②	57人

表 2) 定例会活動スケジュール

日程	伊都Ⅰ	伊都Ⅱ	伊都Ⅲ	伊都Ⅳ	馬出	大橋	参加人数
6/2	VR	IQ	いろこと	研修		60 秒	53 人
6/9	CS	IQ	VR		じぶん学	60 秒	53 人
6/16	BM		いろこと	研修		60 秒	49 人
6/23	CS	IQ	いろこと		じぶん学	60 秒	51 人
6/30	CS	IQ	VR	研修		60 秒	49 人
7/7	CS	BM	いろこと	研修	じぶん学	60 秒	57 人
7/14	CS	IQ	いろこと		じぶん学	60 秒	53 人
10/6	CS	イベント	いろこと	研修		啓発物	49 人
10/20	CS	イベント	いろこと		じぶん学	啓発物	50 人
10/27	イベント	IQ	いろこと		じぶん学	啓発物	54 人
11/10	わたし色		イベント		じぶん学	啓発物	53 人
12/1		IQ	イベント		じぶん学	啓発物	48 人
12/8	わたし色		イベント		じぶん学	啓発物	51 人
12/15	わたし色		イベント		じぶん学	啓発物	57 人
12/22	わたし色	IQ	九大祭			啓発物	51 人
1/19	わたし色		九大祭		じぶん学	啓発物	58 人
1/26		IQ	九大祭		じぶん学	啓発物	57 人

CS・・・キャンパススイッチ

BM・・・バリアフリーマップ・設備改善

VR・・・VR・ルート探索アプリ

IQ・・・IQ ネット

イベント・・・啓発イベント班

わたし色・・・わたし色と班

いろこと・・・いろことプロジェクト

九大祭・・・九大祭班

じぶん学・・・九大じぶん学

60 秒・・・60 秒でわかる合理的配慮

啓発物・・・啓発物作成

3. 參考資料

2025 年度 PS 学生一覧

区分	学年	氏名	所属
EPS	修士1年	重信まこ	生物資源環境科学府
	学部4年	鈴木万結	芸術工学部
		武内悠	理学部
		武末愛理	教育学部
		古瀬健心	法学部
		秋武百華	医学部
		白水愛彩	法学部
APS	博士3年	黄新皓	地球社会統合科学府
	修士2年	延原拓叶	工学府
		濱もも	統合新領域科学府
	学部4年	上村菜月	教育学部
		清田みお	教育学部
		中島諒子	芸術工学部
		林朋紘	芸術工学部
		藤原涼	法学部
		三浦愛佳	共創学部
		本岡真奈	教育学部
		森悠一郎	経済学部
		内村颯杜	芸術工学部
	学部3年	北村由依菜	共創学部
		隈本陽太弥	教育学部
		黒田咲希	医学部
		檜木うだつ	教育学部
		野中莉央	教育学部
		濱崎裕理	経済学部
		深堀由倫香	教育学部
		福長奏	共創学部
		松尾和都	医学部
		森下はなの	教育学部
		山口紬	教育学部
	学部2年	石田華蓮	教育学部
		伊牟田凜々	共創学部
		岩元凜	医学部
		上田慶子	工学部
		江口理子	医学部
		大野小春	文学部
		大森日南子	芸術工学部
		神谷麻央	芸術工学部
		友岡ひかり	医学部
		永野咲	共創学部
		馴松愛子	薬学部
		南里凪咲	共創学部
		日永田涼葉	理学部
		吉村歩乃佳	芸術工学部

区分	学年	氏名	所属
SPS	学部4年	山田和彦	共創学部
	学部3年	江島輪	医学部
		佐藤理菜	経済学部
		藤田真那	法学部
	学部2年	瀧内杏莉	医学部
	学部1年	荒瀬泰珂	経済学部
		井上紡	共創学部
		梅崎愛子	工学部
		我如古咲心	教育学部
		川口ひなた	理学部
		川村葉絵	経済学部
		河本花楓	芸術工学部
		高木明日香	工学部
		樋口珠希	経済学部
		平井実祐	工学部
		福元爽	工学部
		舟越ちなつ	芸術工学部
		舩越春花	経済学部
		松尾果凜	共創学部
		宮居里凪	教育学部
		村川まなか	医学部

2026年2月16日付

九州大学アクセシビリティピアサポートリーダー認定

九州大学では、PS として障害者支援に関する必要な知識を習得した上で、学内における障害者支援活動に積極的に参加し、指導的役割を果たした学生を「九州大学障害者支援ピアサポートリーダー」として認定しています。

2026 年 3 月 25 日、本学では第 11 号、第 12 号の九州大学障害者支援ピアサポートリーダーとして、理学部 4 年の武内悠さんと教育学部 4 年の武末愛理さんが認定されました。



カバーデザイン制作意図

制作者：工学部 1 年 福元爽

2025 年度の新たな取り組みとして、わたし色と班の活動が始まりました。その活動の一環として、私たちはセクシュアリティの多様性について考えを深め、理解を深める機会を持ちました。そこでの学びをもとに表紙を作成しました。

着想のヒントにしたのは、皮肉にも「色眼鏡で見る」という言葉です。「どうせ偏った見方をされる」というネガティブなイメージを、あえて Ally（理解者）としての視点に置き換えることはできないかと考えました。

描いたのは、6 色の虹色レンズがはめ込まれた眼鏡。この眼鏡は、誰かを決めつけるための道具ではなく、これまでの固定観念を脱ぎ捨て、多様な個性を鮮やかに、そしてフラットに見つめるための「心のフィルター」です。

私たち一人ひとりの見る目が変われば、世界も少しずつ優しく変わっていくはずです。この表紙が、誰かの心にそっと寄り添い、対話のきっかけとなることを願っています。

アクセシビリティ・ピアサポーター学生の指導担当

- ・田中 真理（室長、教授）
- ・吉田 ゆり（部門長、教授）
- ・大野 愛哉（准教授）
- ・羽野 暁（特任准教授）
- ・脇浜 幸則（助教）
- ・植田 隆博（助教）
- ・間田 陽子（テクニカルスタッフ）
- ・永田 萌奈（テクニカルスタッフ）
- ・末吉 穂月（テクニカルスタッフ）
- ・日下部 修（テクニカルスタッフ）

アクセシビリティ・ピアサポーター学生の活動にあたって、
学務部学生支援課のご協力をいただきました。

本活動報告書には「K-UD フォント」（九州大学ユニバーサルデザインフォントの略）
を使用しています。K-UD フォントは、株式会社フォントワークスが九州大学大学院芸
術工学研究院との共同開発に基づいて制作したUD（ユニバーサルデザイン）フォント
シリーズから選定し、命名しました。より読みやすく、より見やすく、より伝えやすい
文字であることを目的としてデザインされた書体です。

九州大学アクセシビリティ・ピアサポーター

活動報告書 2025

2026 年 8 月発行



気づきスイッチ

発行元 九州大学キャンパスライフ・健康支援センター
インクルージョン支援推進室

〒819-0395 福岡市西区元岡 744 伊都キャンパス センター 1 号館 1 階

TEL：092-802-5859

E-mail：inclusion@chc.kyushu-u.ac.jp

編集 荒瀬泰珂、梅崎愛子、山口紬、河本花楓、平井実祐、村川まなか
カバーデザイン 福元爽

